

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【事業年度】	第43期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	リコーリース株式会社
【英訳名】	RICOH LEASING COMPANY, LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 社長執行役員 瀬川 大介
【本店の所在の場所】	東京都江東区東雲一丁目7番12号
【電話番号】	03(6204)0700(大代表)
【事務連絡者氏名】	取締役 常務執行役員 川口 俊
【最寄りの連絡場所】	東京都江東区東雲一丁目7番12号
【電話番号】	03(6204)0700(大代表)
【事務連絡者氏名】	取締役 常務執行役員 川口 俊
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1)連結経営指標等

回次	第39期	第40期	第41期	第42期	第43期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (百万円)	258,733	275,879	291,116	304,341	313,957
経常利益 (百万円)	16,447	16,843	17,180	16,415	17,383
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	10,136	11,049	11,772	11,306	11,943
包括利益 (百万円)	10,373	11,162	12,231	11,921	11,793
純資産 (百万円)	136,117	145,562	155,998	165,890	174,449
総資産 (百万円)	828,618	878,483	918,659	968,950	1,040,678
1株当たり純資産 (円)	4,344.43	4,644.38	4,975.38	5,288.85	5,588.38
1株当たり当期純利益 (円)	324.71	353.96	377.12	362.19	382.60
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	16.4	16.5	16.9	17.0	16.8
自己資本利益率 (%)	7.7	7.9	7.8	7.1	7.0
株価収益率 (倍)	11.0	9.5	9.5	9.7	8.7
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	47,432	31,231	12,940	36,636	39,867
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	1,067	1,338	1,257	1,333	6,018
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	38,563	35,516	13,696	37,742	45,171
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	617	3,563	3,061	2,833	2,119
従業員数 (人)	917	928	916	908	972
(外、平均臨時雇用者数)	(140)	(127)	(105)	(111)	(58)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を当連結会計年度の期首から適用しており、39期以降の主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第39期	第40期	第41期	第42期	第43期
決算年月	2015年 3月	2016年 3月	2017年 3月	2018年 3月	2019年 3月
売上高 (百万円)	252,044	268,315	282,830	295,050	303,681
経常利益 (百万円)	15,866	16,340	16,638	15,856	16,985
当期純利益 (百万円)	9,885	10,823	11,509	11,035	11,833
資本金 (百万円)	7,896	7,896	7,896	7,896	7,896
発行済株式総数 (千株)	31,243	31,243	31,243	31,243	31,243
純資産 (百万円)	134,866	144,029	154,016	163,511	172,738
総資産 (百万円)	825,533	875,466	915,282	964,012	1,036,483
1株当たり純資産 (円)	4,320.32	4,613.86	4,933.80	5,237.98	5,533.58
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額) (円)	50.00 (22.50)	55.00 (27.50)	60.00 (30.00)	70.00 (35.00)	80.00 (40.00)
1株当たり当期純利益 (円)	316.67	346.71	368.69	353.51	379.08
潜在株式調整後1株当たり当 期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	16.3	16.5	16.8	17.0	16.7
自己資本利益率 (%)	7.6	7.8	7.7	7.0	7.0
株価収益率 (倍)	11.3	9.6	9.7	10.0	8.8
配当性向 (%)	15.8	15.9	16.3	19.8	21.1
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	762 (95)	780 (86)	779 (86)	790 (85)	845 (36)
株主総利回り (%) (比較指標：配当込み TOPIX) (%)	147.2 (130.7)	140.5 (116.5)	152.1 (133.7)	152.9 (154.9)	148.8 (147.1)
最高株価 (円)	3,760	4,045	3,840	4,420	3,905
最低株価 (円)	2,378	3,045	2,493	3,340	2,960

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を当事業年度の期首から適用しており、39期以降の主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

2【沿革】

年月	事項
1976年12月	リコークレジット株式会社として設立。本社を東京都中央区銀座六丁目14番6号に置き、事務用機器を中心にクレジット販売事業及び金融機関提携ローンを中心とした融資事業の営業開始
1977年1月	東京、横浜、千葉、埼玉の各営業所を開設
1977年3月	本社所在地を東京都港区南青山一丁目15番5号に移転
1977年6月	事務用機器を中心にリース事業の営業開始
1978年3月	車両のリース取扱い開始
1978年4月	札幌、仙台、名古屋、大阪、広島、福岡の各営業所を開設
1979年2月	本社所在地を東京都中央区銀座六丁目11番5号に移転
1979年7月	レンタル事業の営業開始
1980年7月	車両ローンの取扱い開始
1981年4月	本社所在地を東京都中央区銀座七丁目11番15号に移転 東京ビジネスレント株式会社を設立
1984年2月	売掛金集金代行業の営業開始
1984年4月	商号をリコーリース株式会社に変更
1985年10月	兵庫営業所を神戸市に開設
1986年3月	ファクタリング事業の営業開始
1988年5月	住宅ローンの取扱い開始
1991年4月	京滋営業所を京都市に開設
1993年4月	一般設備機器リースの専門組織として第一営業部を設置
1994年10月	四国営業所を高松市に開設
1996年1月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場
1997年11月	本社所在地を東京都中央区銀座七丁目16番3号に移転
2000年1月	第5回ディスクロージャー表彰(東京証券取引所)を受賞
2000年11月	ISO9001を取得(販売支援リース分野では当社が初めて)
2001年3月	東京証券取引所市場第一部に指定
2001年11月	ISO14001を取得
2002年7月	リクレス債権回収株式会社を設立
2003年1月	第1回個人株主拡大表彰(東京証券取引所)を受賞
2003年10月	コンプライアンス本部設置と同時に、ISMS(情報セキュリティマネジメントシステム)適合性評価制度の認証を取得(リース会社では当社が初めて)
2003年12月	債権管理プロセスの品質向上を目指し、関東及び近畿にそれぞれコンタクトセンター、オペレーションセンターを開設
2005年12月	テクノレント株式会社の株式を取得
2006年2月	金融サービス事業部を新設
2007年1月	第12回ディスクロージャー表彰(東京証券取引所)を受賞
2008年11月	本社事務所を東京都江東区東雲一丁目7番12号に移転
2011年10月	介護報酬ファクタリングサービス事業開始
2015年12月	東京労働局長より「プラチナくるみん」に認定
2016年9月	厚生労働省が主催する「イクメン企業アワード2016」において、リース会社では初となるグランプリを受賞
2017年7月	住宅賃貸事業の営業開始
2018年3月	株式会社日本政策投資銀行による健康格付において最高ランクの評価を取得し、資金調達を実施
2018年5月	リクレス債権回収株式会社を清算終了
2018年7月	発電事業の営業開始
2019年2月	経済産業省と東京証券取引所が実施する「健康経営銘柄」に2年連続で選定 環境省と一般財団法人地球・人間環境フォーラムが主催する「環境コミュニケーション大賞」の環境報告書部門において優良賞を2年連続で受賞 株式会社日本政策投資銀行による環境格付において最高ランクの評価を取得し、資金調達を実施(4度目)

3【事業の内容】

当社グループ

当社グループは、当社及び連結子会社3社により構成されております。当社グループの事業内容及び当社と子会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりであります。

なお、下記の区分は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

区分	会社名	事業内容
リース・割賦	リコーリース(株)	事務用・情報関連機器、医療機器、産業工作機械等のリース・レンタル・割賦・クレジット事業
	テクノレント(株)	計測機器・情報関連機器等のレンタル
金融サービス	リコーリース(株)	法人向け融資・業界特化型融資・住宅ローン・マンションローン等の貸付、請求書発行・売掛金回収等の代行サービス、介護報酬ファクタリングサービス及び住宅賃貸事業等
	東京ビジネスレント(株)	住宅ローンの保証
その他	リコーリース(株)	リコーグループ会社への融資、リコーグループのファクタリング、発電事業
	テクノレント(株)	計測・校正・機器点検等の受託技術サービス等
	R L 御殿場エナジー(同)	発電事業

(注) 1.前連結会計年度まで子会社であったリクレス債権回収株式会社は、2018年5月付けで清算終了していません。

2. R L 御殿場エナジー合同会社は現在清算手続中であります。

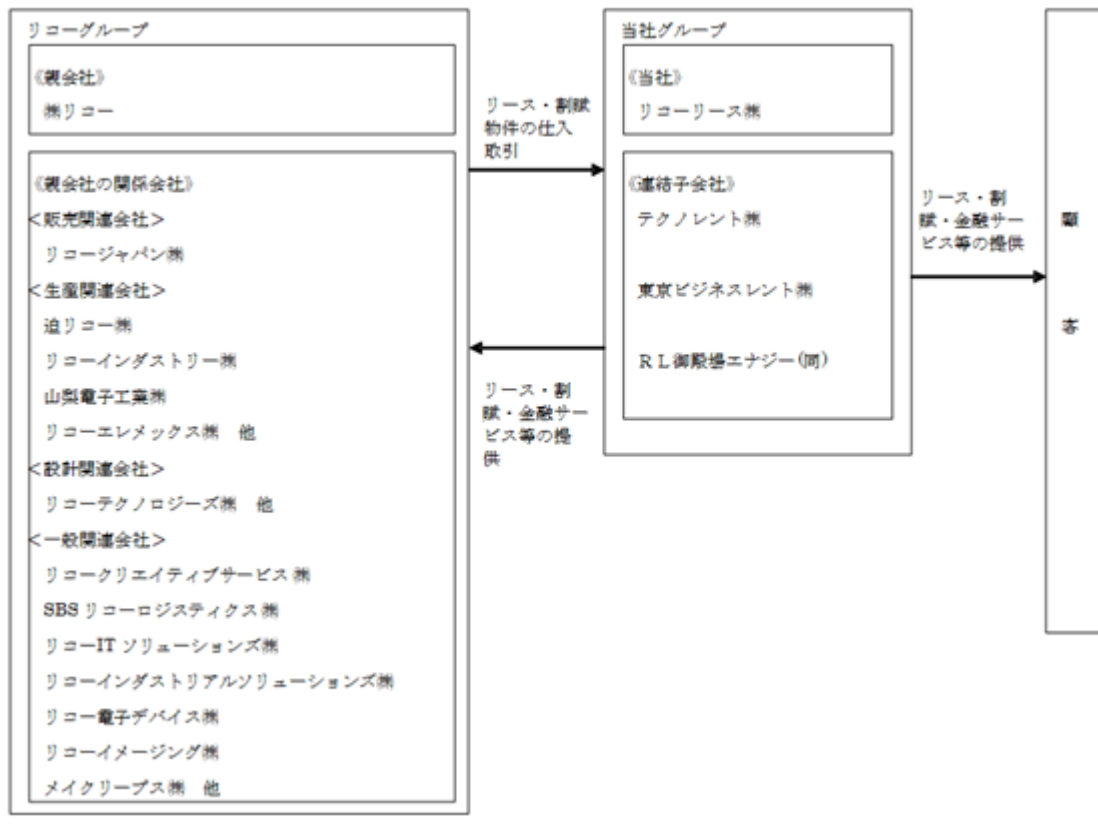
リコーグループ

当社は、親会社である株式会社リコー及びその関係会社により構成されるリコーグループに属しております。リコーグループは、オフィスプリンティング分野、オフィスサービス分野、商用印刷分野、産業印刷分野、サーマル分野及びその他分野において、開発、生産、販売、サービス等の活動を展開しております。

当社は、リコーグループにおける国内唯一の金融事業会社です。親会社の製品をリース物件として顧客にリース等のサービスを提供する「販売支援リース」は、当社のリース・割賦セグメントにおける主要な活動として展開しております。また、リコーグループに対しては、リース・割賦のほか、金融サービスセグメントに区分される、住宅ローン等リコーグループ社員への貸付、請求書発行・売掛金回収代行サービス、その他に区分される、リコーグループ会社への融資、ファクタリング等のサービス提供を行っております。

(事業系統図)

以上に述べた事項を国内における事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) 1. 前連結会計年度まで子会社であったリクレス債権回収株式会社は、2018年5月付けで清算終了しております。

2. R L 御殿場エナジー合同会社は現在清算手続中であります。

4【関係会社の状況】

(1)親会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の 被所有割合 (%)	関係内容
(株)リコー	東京都大田区	135,364	オフィスプリンティング分野、オフィスサービス分野、商用印刷分野、産業印刷分野、サーマル分野及びその他分野においての開発、生産、販売、サービス等の事業	53.03	リース取引、リース物件の仕入、ファクタリング取引、資金の借入。 役員の兼任あり。

(注) 有価証券報告書提出会社であります。

(2)連結子会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
テクノレント(株)	東京都港区	360	計測機器・情報関連機器等のレンタル、計測・校正・機器点検等の受託技術サービス等	100.00	資金の貸付。 レンタル取引。 役員の兼任あり。
東京ビジネスレント(株)	東京都江東区	10	保証業務	100.00	住宅ローンの保証。 役員の兼任あり。
R L 御殿場エナジー(同)	東京都江東区	1	発電事業	100.00	資金の貸付。

(注) 1. 前連結会計年度まで子会社であったリクレス債権回収株式会社は、2018年5月付けで清算終了しております。

2. テクノレント株式会社の株式を追加取得し、2018年12月に完全子会社化いたしました。

3. R L 御殿場エナジー合同会社は現在清算手続中であります。

5【従業員の状況】

(1)連結会社の状況

2019年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
リース・割賦(報告セグメント)	
金融サービス(報告セグメント)	917 (58)
その他	
全社(共通)	55 (-)
合計	972 (58)

- (注) 1. 当社グループでは、セグメント毎の経営組織体系を有しておらず、同一の従業員が複数の事業に従事しております。
2. 従業員数は就業人員(当社グループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。)であり、臨時従業員(人材派遣会社からの派遣社員)は、年間の平均人員を()外数で記載しております。
3. 全社(共通)として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

(2)提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(才)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
845 (36)	41.1	14.2	6,793

セグメントの名称	従業員数(人)
リース・割賦(報告セグメント)	
金融サービス(報告セグメント)	805 (36)
その他	
全社(共通)	40 (-)
合計	845 (36)

- (注) 1. 当社では、セグメント毎の経営組織体系を有しておらず、同一の従業員が複数の事業に従事しております。
2. 従業員数は就業人員(当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。)であり、臨時従業員(人材派遣会社からの派遣社員)は、年間の平均人員を()外数で記載しております。
3. 全社(共通)として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。
4. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3)労働組合の状況

当社グループにおいては、労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

中長期的な会社の経営戦略及び会社の対処すべき課題

わが国の経済は、貿易摩擦による世界経済の減速に加えて、消費増税を控え国内景気に対する減速懸念が強まっており、先行きに対する不透明感が増しております。しかしながら、人手不足などを背景に省力化や生産性の向上に向けた設備投資やサービスに対する需要及びインバウンド関連への投資が底堅く推移すると予想されます。当社の収益環境においては、米国の利上げ観測後退により、歴史的な金融緩和策の当面維持が見込まれ、リース会社のみならず金融機関との競争の激化が継続することで、厳しい状況が続くものと認識しております。

さらに少子高齢化や生産年齢人口割合の低下など人口動態の変化や新技術（AI、IoT、フィンテックなど）を活用した新しいビジネスの発展により、当社グループを取り巻く事業環境は大きく変化することが予想されます。

こうした環境下、当社グループは、2017年度にスタートした3か年の中期経営計画のもと、事業基盤の強化と新しい成長領域の創出を図るとともに、働き方改革の推進、人員とITインフラの強化の推進により組織能力を高め、更なる成長に向けた基盤作りを進めてまいります。

中期経営計画ビジョン：「リース」の先へ

今中期経営計画期間である2017年度から2019年度を、“「リース」の先へ”に向かう成長期として位置づけ、基盤事業周辺の新事業へ進出し、これまで取り組んでいない事業領域やリスクにチャレンジしながらお客様の期待を先取りした事業・商品を研究・開発することで、更なる成長の基盤を築いてまいります。そして、次の中期経営計画期間で“「リース」の先へ”に到達し、リースや金融だけでなく、環境・社会・お客様の発展に役立つサービス・商品を提供できる企業へと進化することを目指します。

中期経営計画の戦略

・事業成長戦略

イ．ベンダーとのアライアンス強化と顧客網の最大活用による揺るぎない営業基盤づくり

当社が保有する約40万社の顧客網に対する接点活動を強化しながら、ベンダーに対する有効なオフラインモデルの提供と戦略的な提携による関係強化を図ります。

ロ．リース以外の提供価値の創造

お客様、市場、時代が求める事業・商品を開発し、新たなリスクテイクによって事業領域を拡大します。

ハ．リコーグループ各社との協業によるリース＋サービスビジネスの展開

製造、販売、物流などグループ各社が持つ強みを組み合わせた新たなサービスやビジネスモデルを創造します。

ニ．創エネ・省エネを軸とした新たな環境分野への挑戦

環境・再生可能エネルギー設備に対する取り組みを強化します。

ホ．社会の変化に対する課題を解決するための金融サービスの開発と提供

多様化する決済手段への対応を強化するとともに、人口動態の変化に対応した金融サービスの開発と提供を進めます。

・組織能力強化戦略

イ．多様化するニーズ・サービスに対応し、更なる商品力・業務効率化を追求する新プラットフォームの構築

新しい事業・サービス・商品の開発・提供を支えるため、またAI等の新しいテクノロジーを活用した業務効率化を推進するためのITインフラの整備を進めます。

ロ．社会、市場、働き方の変化に対応した人財マネジメント

時間、場所にとらわれない柔軟な働き方の実現による生産性の向上と、事業成長に向けた人員のシフトを進めます。また業績貢献に報いるための報酬制度を改定し、社員の成長意欲・チャレンジ精神を育みます。

・CSRの更なる推進

イ．事業活動を通じた環境負荷低減

環境貢献度の増大を目指した環境関連事業の拡大を図ります。

- ロ．持続的な成長を実現するための各ステークホルダーへの貢献
 社会的課題解決に向けて優先順位をつけた活動を推進します。
- ハ．コーポレートガバナンスの継続的な強化
 P D C Aの強化による企業価値向上を目指します。

第44期の連結業績予想

2019年度の経営環境は、世界経済の減速に加えて消費増税を控え、国内景気に対する減速懸念が強まっております。しかしながら、人手不足などを背景に省力化や生産性の向上に向けた設備投資やサービスに対する需要は底堅く推移するものと予想されます。

このような環境の中、当社グループは、2017年4月にスタートした中期経営計画（2017年4月～2020年3月）のもと、事業基盤の強化と新しい成長領域の創出を図るとともに、働き方改革の推進、人員とITインフラの強化の推進により組織能力を高め、更なる成長に向けた基盤作りを進めてまいります。2020年3月期の連結業績予想につきましては、前年度に続き、売上高、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益は増加する見通しです。

連結業績予想、中期経営計画の財務目標は、以下のとおりです。

連結業績予想

	2019年3月期 実績	2020年3月期 予想
売上高	3,139億円	3,214億円
営業利益	172億円	177億円
親会社株主に帰属する当期純利益	119億円	120億円

中期経営計画の財務目標

	2019年3月期 実績	2020年3月期 予想	2020年3月期 中計目標
営業利益	172億円	177億円	183億円
営業資産残高（リース債権流動化控除前）	9,219億円	9,835億円	9,000億円
ROA（総資産当期純利益率）	1.19%	1.12%	1.30% （中期的目標）

（注）上記2020年3月期業績予想は、現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は、様々な要因により異なる場合があることをご承知おきください。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

当社グループでは、想定される経営上のリスクに関して、リスク要因の分析・把握、それに基づく未然防止策の実施、発生時対応策・事業継続計画の策定など変化の激しい経営環境に応じた機動的な対応を行っています。

なお、本項における将来情報に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであり、以下の記載は当社株式への投資に関連する全てのリスクを網羅するものではありませんので、ご留意下さい。

a)貸倒れリスク（信用リスク）

当社グループの主力事業であるリース・割賦事業では、平均契約期間が約5年と信用供与（与信）が比較的長期間にわたることから、契約期間中にお客様の倒産などが発生し、リース料等の回収が困難となる場合があります。

また、経済環境の急激な変化や火災・水災等の天災によって、お客様の経営状況の悪化やリース物件等の破損・喪失で貸倒損失が当社の予想の範囲を超えて増加し、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

また、当社の主要な顧客である中小企業は景気動向の影響をより強く受ける可能性があります。

当社グループでは、約40万社の中堅・中小企業のお客様に対する取引履歴を蓄積し、独自の審査システムを構築することで、信用リスクを定量的に把握・管理しています。また、1契約当たりの平均単価は約240万円と業界平均値よりも低く、信用リスクの分散化が図られております。一方、リース料等の不払いが生じた場合には、販売会社・販売店と協力しリース物件等の売却や他の取引先への二次リース等の手段を講じて貸倒損失の低減を図っています。

b)金利変動リスク及び流動性リスク

当社グループでは、リース物件や割賦物件の購入や融資などのために、金融市場や金融機関から資金調達を行っており、リース会社はその事業構造上、総資産に対する有利子負債の割合が高くなっています。リース料金等は契約時の金利水準とお客様の信用水準に基づいて定額料金で契約を実行しますが、一方で、有利子負債には変動金利による資金調達が含まれているため市場金利の変動が当社グループの業績に影響を与える可能性があります（金利変動リスク）。このため、金利見通しを踏まえた有利子負債における固定金利・変動金利の調達比率は、重要な管理項目の一つであります。

また、市場金利の変動以外でも格付会社から当社の格付が引き下げられた場合、もしくは金融市場の混乱や市場環境が悪化した場合には、必要な資金の確保が困難となるリスク（流動性リスク）があります。また資金調達金利が著しく上昇することにより、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

格付会社名	長期格付	短期格付
株式会社日本格付研究所	AA-	J-1+
株式会社格付投資情報センター	A	a-1
S&Pグローバル・レーティング・ジャパン株式会社	BBB+	A-2

上記は2019年3月31日現在の格付です。

当社グループでは、金利変動リスク・流動性リスクを適正に管理するため、「ALM委員会」を設置し、定期的に金融市場の動向や資産・負債の状況について分析・検討を実施しています。「ALM委員会」で検討された財務戦略は機動的に執行され、最適な調達・運用を目指しています。また、企業体質の更なる強化を図り、格付の維持・向上に取り組んでいます。

ALM (Asset Liability Management) : 資産負債の総合管理。資産と負債の最適な組み合わせを同時に決定し
 総合的に管理する手法のこと。

c)設備投資需要の変動による影響について

リース取引は、企業が設備投資を行う際の調達手段のひとつとして広く利用されています。経済環境の急激な変化やお客様の経営状況の悪化などにより設備投資需要が大幅に減少した場合、リースマーケットの縮小に伴い当社のリース取扱高が減少し、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

d) リコーグループとの取引

当社グループは、販売会社・販売店の営業活動を支援し、一体となった営業活動を行う「販売支援リース」を主軸にしています。リコーグループの販売会社・販売店（以下、リコーグループ）との取引拡大と共に、「販売支援リース」のノウハウを積上げて来ました。そのノウハウをリコーグループ以外の分野にも応用し、営業取引を拡大しています。

リコーグループの国内販売や市場シェアの急激な変動によっては、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。そのため、リコーグループ以外の分野のリース・割賦取引拡大や金融サービス事業の伸長により、本リスクの低減を図っています。リコー関連の取扱高の比率は総取扱高の約4割まで低下しています。

e) 小口リース取引

当社グループが行う「販売支援リース」を主軸とする営業活動は、販売会社・販売店（サプライヤー）との協業をベースにしています。当社は取引先のサプライヤーに対して審査をした上で取引をしていますが、リース業界内では一部のサプライヤーによる悪質なリース契約が発生しています。リース業界では既に対応策として、ユーザーの保護と小口リース取引の健全な発展を目的とした「サプライヤー情報交換制度」の運用を行っており、悪質なサプライヤー排除に努めた結果、苦情件数は年々減少していますが、小口リース取引には、上記の課題が内在しています。

f) 制度変更リスク

当社グループでは、現在の法律、税務及び会計制度等を基準として事業を展開しています。これらの制度が大幅に変更された場合、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。会計制度面では、わが国のIFRS（国際会計基準）導入に伴いリース会計基準が変更される可能性があります。その動向は未だ流動的な面がありますが、IFRSが適用されるとオペレーティング・リースのオンバランス化などリース事業への影響があるものと予想されます。また、IFRSに対応するためのシステム投資費用などの発生が見込まれます。

g) 社会インフラ毀損リスク

当社グループではメーカー、販売会社、物流会社とのサプライチェーンによって、お客様にリース物件等を提供しています。また、リース終了後の物件返却や売却・処分では、物流会社や中古物件販売会社、廃棄業者との取引があります。これらのパートナー企業の稼働を妨げるような停電や交通網遮断等の社会インフラ毀損が起こった場合、リース物件の納品遅れ等のリスクを含めて当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

h) その他のリスクについて

その他に、市場環境の変化や技術革新等により、リース物件の当初見積残存価額よりも実際の処分価額が下回る「残価リスク」、当社内の情報システムのダウンや誤作動などの「システムリスク」、保有する有価証券の価値が下落した場合の「価格変動リスク」、従業員による不適切な事務処理に係る「事務リスク」、法令・社内規程・業界自主ルールなどに違反する「コンプライアンスリスク」、「お客様情報の漏洩リスク」などがあります。

また、デリバティブについては、資金調達における金利変動リスクをヘッジする目的で利用していますが、投機目的のデリバティブ取引は行っていません。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

業績等の概要

(1)業績

当連結会計年度におけるわが国経済は、中国を始め海外経済の減速による輸出の減少などから、先行きに対する不透明感が増す結果となりました。しかしながら、企業の設備投資は、人手不足を補う省力化に向けた投資を中心に堅調に推移しました。

リース業界において、2018年度のリース取扱高は、前期比2.8%増加の5兆129億円となりました。（公益社団法人リース事業協会統計確定値）

このような状況のなか、当社グループにおいては、前期よりスタートさせた3ヵ年中期経営計画（中計）の2年目として、中計で定めた事業成長戦略及び組織能力強化戦略を遂行してまいりました。事業成長戦略のもと、既存事業領域に対する営業強化に加えて新規事業領域の開拓を進め、営業資産の積み上げと同時に営業資産利回りの改善を図りました。組織能力強化戦略では更なる成長を見据え、人員とITインフラの強化や働き方改革の推進を図ってまいりました。

好調な契約獲得による契約実行高の増加に加えて太陽光発電事業などへの事業投資も積極的に取り組み、当連結会計年度における営業資産残高は、大幅に増加しました。

その結果、売上高、営業利益、経常利益及び親会社株主に帰属する当期純利益はいずれも増加しました。売上高、経常利益及び親会社株主に帰属する当期純利益は過去最高を更新しました。

リース・割賦

リース・割賦事業は、収益性重視の方針のもと、新規契約獲得利回りを改善させつつ営業資産残高を増加させました。契約実行高は、事務用機器・情報関連機器、商業及びサービス業用機器、車両及び輸送用機器、再生可能エネルギー発電設備が好調に推移しました。その結果、売上高、セグメント利益ともに増加しました。

金融サービス

金融サービス事業は、法人や医療機関向けを中心に融資の取扱いが好調に推移したことに加え、住宅賃貸資産への投資を進め、営業資産残高を大幅に増加させました。また、集金代行サービスや介護報酬ファクタリングサービスが順調に推移していることから受取手数料も増加しました。その結果、売上高、セグメント利益ともに増加しました。

その他

その他の事業は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、計測・校正・機器点検等の受託技術サービス、リコーグループ内での融資、ファクタリング、国内キャッシュ・マネジメント・システムの運営、及び太陽光発電施設の運営等が含まれております。営業資産残高は、太陽光発電関連の資産取得などから増加しましたが、売上高、セグメント利益ともに減少しました。

(2)キャッシュ・フロー

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動によるキャッシュ・フローは、前期に比べて支出が増加しました。この支出は主に割賦債権の増加、営業貸付金の増加、賃貸資産の取得によるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動によるキャッシュ・フローは、前期に比べて支出が増加しました。この支出は主に社用資産の取得と投資有価証券の取得によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動によるキャッシュ・フローは、前期に比べて収入が増加しました。この収入は主にコマーシャル・ペーパー、社債の発行によるものであります。

以上の結果、当連結会計年度における現金及び現金同等物の残高は、前連結会計年度末に比べ減少しました。

営業取引の状況

(1) 契約実行高

連結会計年度における契約実行高の実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	前連結会計年度 (自2017年4月1日 至2018年3月31日) (百万円)	当連結会計年度 (自2018年4月1日 至2019年3月31日) (百万円)	前期比(%)
リース			
事務用・情報関連機器	148,298	148,652	100.2
産業・土木・建設機械	11,802	16,741	141.8
医療機器	25,708	24,566	95.6
商業及びサービス業用機器	11,504	11,651	101.3
その他	24,944	25,163	100.9
ファイナンス・リース計	222,259	226,776	102.0
オペレーティング・リース	13,305	17,400	130.8
リース計	235,565	244,177	103.7
割賦	68,720	79,506	115.7
リース・割賦計	304,285	323,683	106.4
金融サービス	34,344	48,880	142.3
報告セグメント計	338,630	372,564	110.0

(注) 1. リースについては、取得した賃貸用資産の取得金額、割賦については、割賦債権から割賦未実現利益を控除した額を表示しております。なお、再リース取引の実行額は含んでおりません。

2. セグメントでその他に区分されるリコーグループ向け融資は、反復取引であることから上記に記載しておりません。

(2)営業資産残高

連結会計年度末における営業資産残高をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
	期末残高 (百万円)	構成比(%)	期末残高 (百万円)	構成比(%)
リース				
事務用・情報関連機器	358,854	43.1	361,310	40.3
産業・土木・建設機械	45,869	5.5	52,775	5.9
医療機器	78,437	9.4	73,795	8.2
商業及びサービス業用機器	31,379	3.8	32,560	3.6
その他	61,605	7.4	69,371	7.7
リース債権流動化対象物件	24,748	3.0	24,700	2.8
ファイナンス・リース計	551,398	66.3	565,113	63.0
オペレーティング・リース	23,059	2.8	29,058	3.2
リース計	574,457	69.1	594,172	66.2
割賦	111,313	13.4	133,163	14.8
リース・割賦計	685,771	82.5	727,335	81.1
金融サービス	139,562	16.8	160,904	17.9
報告セグメント計	825,333	99.2	888,240	99.0
その他	6,312	0.8	8,969	1.0
合計	831,645	100.0	897,210	100.0

(注) 1. 割賦事業については、割賦債権から割賦未実現利益を控除した額を表示しております。

2. 上記営業資産残高は、連結貸借対照表における割賦未実現利益を控除した割賦債権の残高、リース債権及びリース投資資産、営業貸付金、有形・無形の賃貸資産等の各残高をセグメント別に集計し、記載しております。

(3)営業実績

前連結会計年度における営業実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

前連結会計年度（2017年4月1日～2018年3月31日）

セグメントの名称		売上高 (百万円)	売上原価 (百万円)	差引利益 (百万円)	資金原価 (百万円)	売上総利益 (百万円)
リース	ファイナンス・リース	222,276	-	-	-	-
	オペレーティング・リース	21,365	-	-	-	-
	リース計	243,642	219,406	24,235	757	23,478
割賦		50,717	47,953	2,764	144	2,620
リース・割賦計		294,360	267,360	27,000	901	26,098
金融サービス		7,345	2,496	4,848	172	4,676
報告セグメント計		301,705	269,857	31,848	1,073	30,774
その他		2,636	2,136	499	13	485
合計		304,341	271,994	32,347	1,087	31,260

(注) 売上高について、セグメント間の内部売上高または振替高は含まれておりません。

また、上記表の売上原価と資金原価の合計額が、連結損益計算書における売上原価の金額となります。

当連結会計年度における営業実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

当連結会計年度（2018年4月1日～2019年3月31日）

セグメントの名称		売上高 (百万円)	売上原価 (百万円)	差引利益 (百万円)	資金原価 (百万円)	売上総利益 (百万円)
リース	ファイナンス・リース	225,586	-	-	-	-
	オペレーティング・リース	23,981	-	-	-	-
	リース計	249,568	224,515	25,053	685	24,367
割賦		53,579	50,650	2,929	147	2,782
リース・割賦計		303,148	275,165	27,983	833	27,150
金融サービス		8,282	2,703	5,578	177	5,401
報告セグメント計		311,431	277,869	33,561	1,010	32,551
その他		2,525	2,121	404	12	392
合計		313,957	279,990	33,966	1,022	32,943

(注) 売上高について、セグメント間の内部売上高または振替高は含まれておりません。

また、上記表の売上原価と資金原価の合計額が、連結損益計算書における売上原価の金額となります。

財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている企業会計の基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたって、期末日における資産・負債の金額及び決算期における収益・費用の金額に影響を与える見積りを使用する必要があります。当社において、連結財務諸表に重要な影響を与えていると考えているものは次のとおりであります。

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率、貸倒懸念債権及び破産更生債権については財務内容評価法によっております。

(2) 当連結会計年度末の資産、負債及び純資産の状況

当連結会計年度末における総資産は前連結会計年度末に比べ増加し、純資産も増加しました。自己資本比率は前期末に比べて低下しました。資産の部、負債の部、純資産の部における主な内容は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)	増減
総資産(百万円)	968,950	1,040,678	71,727
純資産(百万円)	165,890	174,449	8,558
自己資本比率(%)	17.0	16.8	0.2

資産の部

当連結会計年度末の総資産は、契約実行高の増加により営業資産残高が増加したことなどで、前連結会計年度末に比べ増加しました。

負債の部

有利子負債は、営業資産残高の増加に伴う資金調達を実行したことなどから前連結会計年度末に比べ増加しました。

純資産の部

純資産は、親会社株主に帰属する当期純利益による増加と剰余金の配当による減少等で、前期末に比べて増加しました。

(3) 当連結会計年度の経営成績の分析

当社では、中期経営計画(中計)の最終年度である2020年3月期におきまして、以下の財務目標を目指しております。

本中計期間では、事業成長を目的としているため、稼ぐ力を表す「営業利益」とストックビジネスの将来の利益の源泉である「営業資産残高」を目標にしております。

本中計策定時のそれぞれの目標は以下の通りです。

イ. 営業利益	183億円
ロ. 営業資産残高(リース債権流動化控除前)	9,000億円

また、投下資本全体の運用効率・収益性を測る指標である「ROA」を中期的目標として、以下を目指しております。

ハ. ROA(総資産当期純利益率)	1.30%
-------------------	-------

財務目標	第42期 (2018年3月期)	第43期 (2019年3月期)	増減
営業利益	165億円	172億円	+7億円
営業資産残高(リース債権流動化控除前)	8,563億円	9,219億円	+655億円
ROA(総資産当期純利益率)	1.20%	1.19%	0.01ポイント

・営業利益

営業資産の積み上げと同時に営業資産利回りの改善を図り、さらに受取手数料の増加により、売上総利益が増加しました。この売上総利益の増加が、中計で定めた組織能力強化戦略に基づく人員とITインフラの強化などによる販売費及び一般管理費の増加を吸収し、当連結会計年度の営業利益は増加しました。

・営業資産残高（リース債権流動化控除前）

当連結会計年度の営業資産残高（リース債権流動化控除前）は、リース・割賦及び融資などの取扱いが好調に推移したことから増加しました。

・総資産当期純利益率（ROA）

リース・割賦及び融資などの好調な取扱いによる営業資産残高の増加を主因とする総資産の増加率が営業利益の増加率を上回ったことから、当連結会計年度の総資産当期純利益率（ROA）は、わずかに低下しました。しかし、依然としてリース業界の中では高い水準を維持しております。

（4）資金の調達状況、及び資金の流動性についての分析

営業資産残高の増加に伴う資金調達を実行したことから、当連結会計年度の有利子負債残高（リース債務を除く）は増加しました。低金利の環境下、低利かつ安定的に資金調達を実施しております。

また、必要資金の確保と運転資金の効率的な調達を行うため金融機関20社と総額1,385億円の当座貸越契約及び貸出コミットメント契約を締結しております。

4【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【賃貸資産】

(1) 設備投資等の概要

当社グループ（当社及び連結子会社）における当連結会計年度の賃貸資産設備投資（無形固定資産を含む）は、次のとおりであります。

区分	取得価額（百万円）
オペレーティング・リース資産	17,400

（注）ファイナンス・リース取引終了後の再リース契約の締結により、リース投資資産から振り替えた資産は含んでおりません。

なお、当連結会計年度において、賃貸取引の終了等により、次の資産を売却・除却しました。その内訳は次のとおりであります。

区分	帳簿価額（百万円）
オペレーティング・リース資産	1,062

(2) 主要な設備の状況

当社グループ（当社及び連結子会社）における賃貸資産は、次のとおりであります。

区分	帳簿価額（百万円）
オペレーティング・リース資産	35,646

(3) 設備の新設、除却等の計画

重要な設備の新設・除却等の計画はありません。なお、取引先との契約等に基づき、オペレーティング・リースに係る資産の取得及び除却等を随時行っております。

2【自社用資産】

(1) 設備投資等の概要

当期は太陽光発電事業用設備の取得によって建設仮勘定及び機械及び装置が増加しております。

(2) 主要な設備の状況

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

提出会社

（2019年3月31日現在）

事業所名 （所在地）	セグメントの名称	設備の 内容	帳簿価額						従業員数 （人）
			建物 （百万円）	機械及び装置 （百万円）	車両 （百万円）	器具備品 （百万円）	建設仮勘定 （百万円）	合計 （百万円）	
本社ほか （東京都江東区ほか）	リース・割賦、 金融サービス、 その他	事務所	65	2,659	37	410	1,405	4,578	845 (36)

（注）1．金額には消費税等を含めておりません。

2．上記には本社を含め全国各地24ヶ所の事業部、支社、営業所、出張所を含んでおります。

3．上記事務所はすべて賃借しており、その賃借料は年間398百万円であります。

4．従業員数の（ ）は、臨時従業員数を外書しております。

国内子会社

（2019年3月31日現在）

会社名	事業所名 （所在地）	セグメントの名称	設備の 内容	帳簿価額					従業員数 （人）
				建物 （百万円）	器具 備品 （百万円）	リース 資産 （百万円）	土地 （百万円）	合計 （百万円）	
テクノレント㈱	本社ほか （東京都港区ほか）	リース・割賦、 その他	事務所	26	24	2	0	53	127 (22)

（注）1．金額には消費税等を含めておりません。

2．従業員数の（ ）は、臨時従業員数を外書しております。

(3) 設備の新設、除却等の計画

特記すべき事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	120,000,000
計	120,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2019年6月21日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	31,243,223	31,243,223	東京証券取引所 (市場第一部)	権利内容に何ら 限定のない当社 における標準と なる株式であ り、単元株式数 は100株であり ます。
計	31,243,223	31,243,223	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2003年3月31日 (注)	1,950	31,243	1,556	7,896	1,553	10,159

(注) 転換社債の株式転換による増加(2002年4月1日~2002年9月27日)

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満 株式の状況 (株)	
	政府及び 地方公共団 体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	22	21	217	154	47	25,739	26,200	-
所有株式数 (単元)	-	32,017	3,062	173,550	69,573	50	33,934	312,186	24,623
所有株式数の 割合(%)	-	10.26	0.98	55.59	22.29	0.02	10.87	100.00	-

(注) 1. 自己株式26,820株は、「個人その他」に268単元、「単元未満株式の状況」に20株含まれております。

2. 「その他の法人」及び「単元未満株式の状況」の欄には、証券保管振替機構名義の株式がそれぞれ7単元及び40株含まれております。

(6)【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式 を除く。)の 総数に対 する所有株 式数の割合 (%)
株式会社リコー	東京都大田区中馬込一丁目3番6号	16,540	52.99
BBH FOR FIDELITY PURITAN TR : FIDELITY SR INTRINSIC OPPORTUNITIES FUND (常任代理人 株式会社三菱 UFJ銀行 決済事業部)	245 SUMMER STREET BOSTON,MA 02210 U.S.A (東京都千代田区丸の内二丁目7番1号)	1,070	3.43
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	995	3.19
BBH FOR FIDELITY LOW-PRICED STOCK FUND (PRINCIPAL ALL SECTOR SUBPORTFOLIO) (常任代理人 株式会社三菱UFJ 銀行 決済事業部)	245 SUMMER STREET BOSTON,MA 02210 U.S.A (東京都千代田区丸の内二丁目7番1号)	762	2.44
コカ・コーラボトラーズジャパン株 式会社	東京都港区赤坂九丁目7番1号	502	1.61
THE BANK OF NEW YORK, TREATY JASDEC ACCOUNT (常任代理人 株式会社三菱UFJ 銀行 決済事業部)	AVENUE DES ARTS,35 KUNSTLAAN,1040 BRUSSELS,BELGIUM (東京都千代田区丸の内二丁目7番1号)	416	1.33
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口9)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	376	1.20
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY 505001 (常任代理人 株式会社みずほ銀 行 決済営業部)	P.O.BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 U.S.A. (東京都港区港南二丁目15番1号 品川インターシ ティA棟)	322	1.03
日本マスタートラスト信託銀行株式 会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	311	1.00
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	303	0.97
計	-	21,599	69.19

(注) 1. 信託銀行等の信託業務に係る株式数については、当社として網羅的に把握することができないため、株主名簿上の名義で所有株式数を記載しております。

2. FMR LLCから2018年2月22日付で提出された大量保有報告書の変更報告書により、2018年2月15日現在で以下のとおり株式を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として2019年3月31日時点における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (株)	株券等保有割合 (%)
FMR LLC	245 Summer Street, Boston, Massachusetts 02210, USA	株式 2,795,391	8.95

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 26,800	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 31,191,800	311,918	-
単元未満株式	普通株式 24,623	-	-
発行済株式総数	31,243,223	-	-
総株主の議決権	-	311,918	-

(注) 「完全議決権株式(その他)」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が700株含まれております。また、「議決権の数」の欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数7個が含まれております。

【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
リコーリース株式会社	東京都江東区東雲 一丁目7番12号	26,800	-	26,800	0.09
計	-	26,800	-	26,800	0.09

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	87	304
当期間における取得自己株式	-	-

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他 (単元未満株式の売渡請求による売渡)	-	-	-	-
保有自己株式数	26,820	-	26,820	-

(注) 1. 当期間における処理自己株式には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれておりません。

2. 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3【配当政策】

当社は、中長期的に安定した株主還元を基本方針とし、確実な成長と適正な資本の充実及び財務体質の強化を図りながら着実に株主配当を伸長してまいります。なお、株主還元の中期的目標として配当性向25%を掲げております。

当社は、株主への利益還元の機会を充実させることを目的として、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うこととしており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当期の配当については、前期比10円増配の80円(内期末配当金として40円)の普通配当を行いました。この結果、連結配当性向は20.9%となりました。

内部留保資金につきましては、当社の財産であります営業資産には、常にある一定のリスクが存在しておりますので、そのリスクに備えることは重要であると認識しております。自己資本の充実=財務体質の強化によって安全性を向上させることは、当社の経営基盤を一層強固なものにし、事業戦略展開に大きく貢献すると同時に、株主の皆様へ安定的に株主還元を行うことにも繋がるものと認識しております。

当社は、取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2018年10月25日 取締役会決議	1,248	40.0
2019年6月19日 定時株主総会決議	1,248	40.0

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスの基本的な考え方

当社グループは、企業倫理と遵法に基づき、経営の透明性を確保しつつ、競争力の強化を目指したコーポレート・ガバナンスに取り組んでおります。また当社グループは、ステークホルダーを顧客、取引先、株主、社員、社会と定め、信頼関係を構築し、これにより、持続的な成長と企業価値の増大を図ってまいります。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

a. 企業統治の体制の概要

当社の取締役会は常勤取締役4名及び高い見識を備えた非常勤取締役1名、社外取締役4名の計9名で構成されており、経営に関する重要事項及び法令・定款等で定められた事項について審議し、意思決定を行っております。また、執行役員制度を導入しており、取締役会は執行役員を選任し、権限と責任を定め、業務の執行を委嘱することにより、意思決定及び業務執行の迅速化を図っております。業務執行においては、社長執行役員が取締役会の決定した基本方針に基づき、業務執行上の最高責任者として業務を統括しております。社長執行役員と所定の要件を満たす執行役員から構成される経営会議では、業務執行に関する重要事項について協議・決定しております。取締役会は、各執行役員の業務執行状況の監督を行うほか、社長執行役員に内部統制体制の構築を指示し、その整備運用の方針及びその実施結果について定期的に報告を求め、内部統制体制の継続的強化を図っております。

当社は監査役会設置会社であり、社外監査役2名を含む監査役3名で構成されています。監査役は、監査方針及び監査計画に基づき、取締役会、経営会議などの重要な会議への出席、重要書類の閲覧、業務及び財産の状況調査などを通じて、取締役及び執行役員の職務執行を監査しております。また、代表取締役と常勤監査役は、株主からのそれぞれの受託責任に基づき、会社経営について緊密な意見交換を行っております。監査役の機能強化に関する取り組みとして、監査役の職務執行を補助する従業員を内部監査部門に配置し、監査役の指揮命令のもと、業務を補助する体制をとっております。また、取締役及び従業員は監査役に対して、法定の事項に加え、「法令・定款に違反する重大な事実、不正行為または当社及び子会社に著しい損害を与えるおそれのある事実を発見したとき、当該事実に関する事項」「内部監査及び子会社調査の結果」「当社及び子会社役員からの内部通報制度による内部通報の状況」「その他監査役が報告を求めた事項」について報告する体制としております。

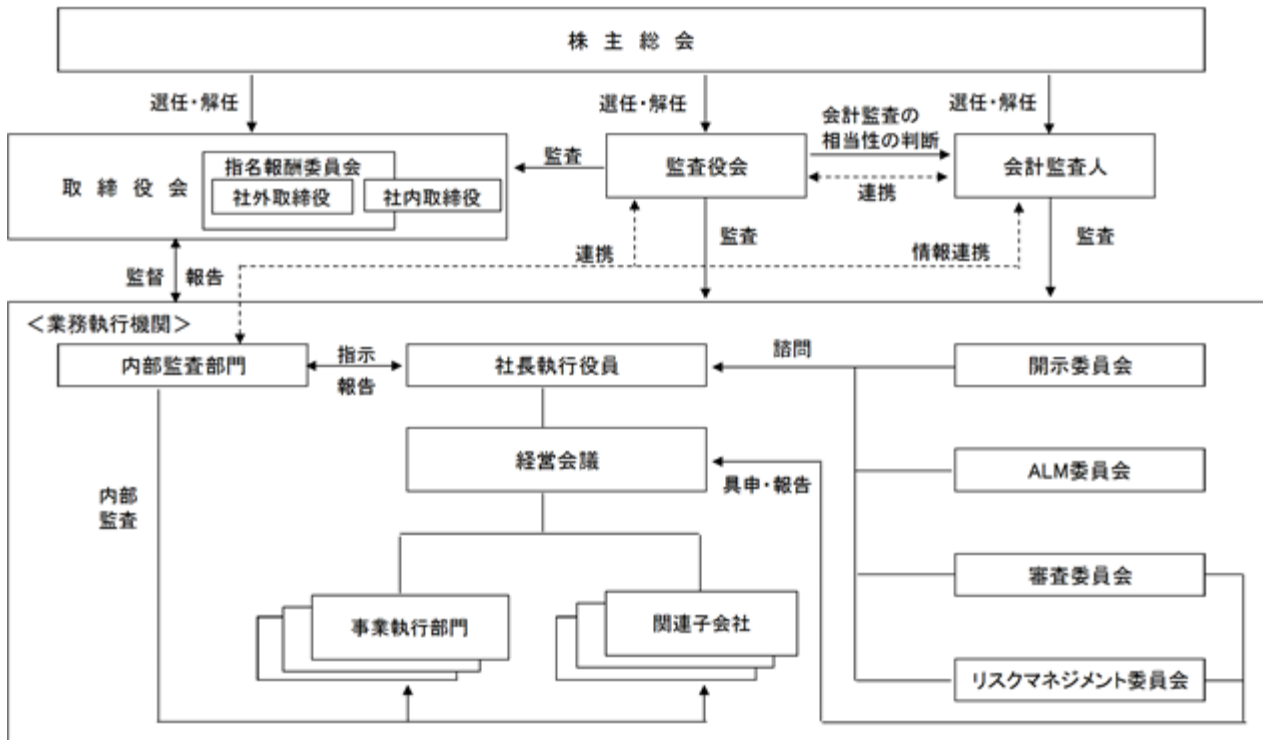
また、取締役会の諮問機関として、取締役候補の指名と経営陣幹部の選解任、最高経営責任者の後継者計画の策定・運用および取締役報酬の決定について、客観性・透明性・妥当性の確保を図ることを目的に、社外取締役全員と社長執行役員である代表取締役で構成する指名報酬委員会を設置しております。

そのほか、社長執行役員の諮問機関として、次に掲げる委員会を設置しております。

- ・ 開示委員会
リコーリースグループにおける企業情報の開示を効果的・効率的に行うことを目的
- ・ ALM委員会
リスクの適正管理と収益の極大化を図るべく、資産・負債管理を適切に行うことを目的
- ・ 審査委員会
審査業務に係わる審議・決定ならびに審査関連事項の報告を行うことを目的
- ・ リスクマネジメント委員会
リコーリースグループにおけるリスクマネジメントの展開推進を効果的・効率的に行うことを目的

機関の構成員（ は議長を表します）

役職名	氏名	取締役会	監査役会	指名報酬委員会	経営会議
代表取締役	瀬川 大介				
取締役	中村 徳晴				
取締役	佐野 弘純				
取締役	川口 俊				
取締役	佐藤 慎二				
社外取締役	志賀 こず江				
社外取締役	瀬戸 薫				
社外取締役	二宮 雅也				
社外取締役	荒川 正子				
常勤監査役	石黒 一也				
社外監査役	百武 直樹				
社外監査役	徳嶺 和彦				
常務執行役員	眞鍋 求				
執行役員	荒木 優一				



b.当該体制を採用する理由

当社は、企業経営の主体である経営執行・事業執行の緊張感を醸成し、その質とスピードの一層の向上を図るため、上記の企業統治の体制を採用しております。

企業統治に関するその他の事項

内部統制システム、リスク管理体制、及び子会社の業務の適正を確保するための体制の整備の状況

<内部統制システムに関する基本方針>

当社は、「私達らしい金融サービスで豊かな未来への架け橋となります」を新たな経営理念とし、変わりゆく社会により貢献し、お客さまそして自己の未来を創造していくことを目指します。

事業構造変革に挑戦するとともに、職務の執行が適法、適正、効率的に行われるため、内部統制システムを整備・運用し、その継続的な改善に努めます。

・取締役及び従業員の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- 1)当社の取締役会は、法令・定款が定める事項及び社内規程に定めるリコーリースグループ経営に関わる重要な意思決定事項を審議し決定します。
- 2)取締役及び従業員はリコーリースの経営理念のもと、法令はもとより社会通念及び企業倫理の遵守を業務執行の最重要方針とします。そのため、リコーグループ企業行動規範を遵守し、取締役はこれを率先して周知・浸透させます。
さらにこれを全社に徹底するために、コンプライアンス担当責任者を選任し、推進担当部門を定め、教育・啓蒙を行います。また、コンプライアンスに関する通報・相談窓口の「ホットライン」を設置し、社員に周知を図ります。
- 3)反社会的な活動や勢力に対しては、一切関係をもたないことを、リコーリースグループの基本姿勢とするとともに、反社会的勢力に係わる被害防止や適切な対応実施のため、社内規程や内部管理体制の整備と警察等社外関連団体との通報・情報収集・連携を図り、組織的な対応体制の整備と強化を推進します。
- 4)金融商品取引法及びその他の法令への適合を含め、「法律、社会規範、社内ルールの遵守」、「業務の有効性と効率性の向上」、「財務報告の高い信頼性の維持」、「資産の保全」のために、内部統制システム及びビジネスプロセスの改善に努めます。
- 5)会社情報開示については、情報開示規程により、開示情報の区分、開示手順、開示責任者を定め、開示委員会にて確認・評価することを通じて、情報の正確性、適時性及び網羅性を確保します。
- 6)内部監査部門を設置し、事業の執行状況を法令等の遵守と合理性・効率性の観点から監査し、検討・評価の上、改善に努めます。

・取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役が職務執行として行った意思決定に関する記録・稟議書等については、管理責任部門を定め、法令及び社内規程に基づき作成・保存・管理します。また、必要に応じて閲覧可能な状態で保管します。

・損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- 1)リスクマネジメント規程（リコーグループで定めた規程に準拠）に基づき、損失の危険の発生を未然に防止します。
- 2)万一損失の危険が発生した場合においても、クライシス・インシデント対応標準に基づき、被害（損失）の極小化を図ります。
- 3)損失の危険の管理を網羅的・統括的に管理するために、「リスクマネジメント委員会」を設置し、周知徹底を図ります。
- 4)事業特性上のリスクに対して、社内規程に基づき社長執行役員の諮問機関として下記委員会を設置し、それぞれ総合的に分析・検討し、リスク管理を行います。
 - ・高額案件等の信用リスクに関しては「審査委員会」
 - ・金利変動等の市場リスクに関しては「ALM委員会」

・取締役の職務の執行が効率的に行なわれることを確保するための体制

- 1) 経営理念に基づく経営目的を達成するため、取締役会は事業計画を審議・決定し、社長及び各組織長は、決定された事業計画を全社に周知し、展開します。
取締役会は、毎月、業績の報告を受け、外部環境の変化や計画の進捗状況等を踏まえ、確認・指示する体制をとり、効率的かつ有効性のある職務執行を行います。
- 2) 執行役員制度を導入しており、事業執行については、各事業執行責任者に権限を委譲することにより、意思決定の迅速化を図り、取締役会は執行役員に委ねた事業執行の監督を行います。
また、執行役員等で構成する経営会議を設置し、取締役会から委譲された範囲内でリコーリースグループ最適の観点から、事業執行に関する重要事項の審議及び意思決定を迅速に行える体制をとります。
- 3) 取締役会の決定に基づく職務の執行を効率的に行うため、各組織の業務分掌及び職務権限に関する規程を制定し、それらを適切に運用します。

・当該株式会社並びにその親会社及び子会社からなる企業集団における業務の適正を確保するための体制

- 1) 当社の取締役会は、リコーリースグループ全体の経営監督と重要事項の意思決定を行います。
その実効性を確保するために関係会社管理規程を定め、統括する機能として主管管理部門を設置し、グループの管理を行います。
 - イ 子会社の取締役の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制
当社は、関係会社管理規程に基づき、子会社の取締役の職務の執行に係る事項の報告を受けます。
 - ロ 子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
当社は、リスクマネジメント規程及びクライシス・インシデント対応標準に基づき、子会社を含めたグループ全体の損失の危険の発生に対する未然防止と、損失の危険が発生した場合の被害（損失）極小化を図ります。
 - ハ 子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - ・ 当社は、子会社を含めた事業計画を策定し、グループ全体で効率的かつ有効性のある業務執行を行います。
 - ・ 当社は、当社に準じた職務権限規程等、組織や意思決定に関する体制整備を子会社に推進することで、子会社取締役の効率的な職務執行を促します。また、子会社が重要事項を当社に協議・報告する体制を通じて、グループ戦略の一貫性を保ち、グループ全体での業務執行を効率的に行います。
 - ニ 子会社の取締役及び従業員の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - ・ 当社は、子会社の役職員に対して、リコーグループ企業行動規範を周知・浸透させ、法令遵守に関する教育・啓蒙を行います。また、コンプライアンスに関する通報・相談窓口の「ホットライン」を設置し、子会社の役職員に周知を図ります。
 - ・ 当社は、子会社が、反社会的な活動や勢力に対するリコーリースグループの基本姿勢に則り、体制を整備することを推進します。
 - ・ 当社の内部監査部門は、法令遵守等の観点から、子会社の業務の執行状況に対して定期調査を実施します。
- 2) リコーリースグループはリコーグループとして定められた共通の規則を遵守しつつ、リコーリースグループの独立性が尊重・維持され、利益が損なわれることのないよう、適正に業務を行います。

・ 監査役の職務の執行が実効的に行われることを確保するための体制

- 1) 監査役の職務を補助すべき従業員の取締役からの独立性及び当該従業員に対する指示の実効性の確保に関する事項
 - イ 取締役は、当該従業員を選任し、監査役の職務の執行を補助する体制をとります。
 - ロ 当該従業員は監査役の職務執行を補助するときは取締役の指揮命令を受けません。
また、取締役は、当該従業員の人事評価及び異動については、事前に監査役の意見を聴取し決定します。
 - ハ 取締役は、監査役の当該従業員に対する指示の実効性を確保するため、監査役の要請に基づき、当該従業員の体制整備に努めます。
- 2) 監査役への報告に関する事項

当社の取締役及び従業員は、監査役に対して法定の事項に加え次の事項を報告します。

尚、当社は、監査役に報告を行った役職員に対し、当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを行うことを禁止します。

 - イ 法令・定款に違反する重大な事実、不正行為または当社及び子会社に著しい損害を与えるおそれのある事実を発見したとき、当該事実に関する事項
 - ロ 内部監査及び子会社調査の結果
 - ハ 当社及び子会社役職員からの内部通報制度による内部通報の状況
 - ニ その他監査役が報告を求めた事項
- 3) その他監査役の職務の執行が実効的に行われることを確保するための体制

監査役は、監査役が職務の執行が実効的に行われることを確保するため、当社の取締役は以下の体制を整備し、当社の従業員はこれに協力します。

 - イ 監査役が取締役会の他、経営会議やその他の重要な会議に出席すること
 - ロ 監査役が当社及び子会社の役職員から職務執行状況を聴取すること
 - ハ 監査役が重要な決裁書類等を閲覧すること
 - ニ 監査役の職務執行により生ずる費用等を当社が負担すること

取締役の定数

当社の取締役は10名以内とする旨定款に定めております。

責任限定契約の内容の概要

当社と社外取締役及び社外監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が規定する額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役又は社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

当社は、自己の株式の取得について機動的な対応を可能とするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得できる旨定款に定めております。

中間配当

当社は、会社法第454条第5項の規定により、株主総会の決議によらず取締役会の決議により毎年9月30日を基準日として中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。これは、中間配当を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

(2) 【 役員の状況】

役員一覧

男性10名 女性2名 (役員のうち女性の比率16.7%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 取締役会議長	瀬川 大介	1954年 7月21日生	1980年 3月 株式会社リコー入社 2004年10月 同社 総合経営企画室長 2005年 6月 同社 執行役員 2006年 4月 同社 経理本部長 2009年 5月 InfoPrint Solutions Company,LLC CEO 2013年 6月 株式会社リコー 常務執行役員 2014年 4月 同社 経営革新本部長 2015年 4月 同社 日本統括本部長 2015年 9月 同社 コーポレート統括本部副本部長 2016年 4月 当社 入社 当社 副社長執行役員 2016年 6月 当社 代表取締役 (現任) 当社 社長執行役員 (現任) 2018年 8月 株式会社ピーステックラボ 社外取締役 (現任)	(注) 3	12,400
取締役	中村 徳晴	1965年 8月 3日生	1994年 1月 当社 入社 2004年11月 当社 経営企画室長 2005年12月 テクノレント株式会社 取締役 同社 執行役員 2008年 4月 当社 総合戦略室長 2009年 4月 当社 理事 当社 総合経営企画本部 副本部長 2011年10月 当社 業務本部 業務統括部長 2013年 4月 当社 執行役員 2014年 4月 当社 営業本部 関西支社長 2017年 4月 当社 事業戦略本部長 2018年 4月 当社 常務執行役員 (現任) 2019年 4月 当社 業務統括本部長 (現任) 2019年 6月 当社 取締役 (現任)	(注) 3	420
取締役	佐野 弘純	1963年 5月14日生	1987年 3月 当社 入社 2003年 4月 当社 経営企画室長 当社 営業本部 営業支援部長 2004年11月 当社 関西事業部 副事業部長 2006年10月 当社 支社事業部 中国四国営業部長 2010年10月 当社 営業本部 関西支社長 2014年 4月 当社 執行役員 当社 業務本部 業務統括部長 2015年 4月 当社 業務本部 副本部長 2016年 4月 当社 業務本部長 2018年 4月 当社 常務執行役員 (現任) 当社 FFPR推進本部長 当社 CS-Hub企画本部長 2019年 4月 当社 営業統括本部長 (現任) 当社 営業統括本部 事業戦略本部長 (現任) 当社 営業統括本部 エリア営業本部長 (現任) 2019年 6月 当社 取締役 (現任)	(注) 3	830

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	川口 俊	1963年1月29日生	1986年3月 株式会社リコー 入社 2004年6月 当社 社外監査役 2004年7月 株式会社リコー 経理本部 経理部長 2007年5月 InfoPrint Solutions Company,LLC CFO 2010年8月 Ricoh Americas Holdings, Inc.Senior Vice President 2015年10月 株式会社リコー コーポレート統括本部 グローバルキャピタルマネジメントサポートセンター部長 2018年4月 同社 経理法務本部 財務部長 同社 CEO室長 2018年10月 当社 入社 当社 執行役員 当社 経営管理本部長(現任) 当社 内部統制担当 2019年1月 当社 常務執行役員(現任) 2019年4月 当社 本社統括本部長(現任) 2019年6月 当社 取締役(現任)	(注)3	-
取締役	佐藤 慎二	1960年5月2日生	1983年4月 三井物産株式会社 入社 2010年5月 三井物産フィナンシャルマネジメント株式会社 代表取締役社長 2012年4月 三井物産株式会社 アジア・大洋州本部 CFO アジア・大洋州三井物産株式会社 Senior Vice President 2015年4月 三井物産株式会社 内部監査部 検査役 2017年12月 株式会社リコー 入社 同社 顧問 2018年4月 同社 執行役員(現任) 同社 経理法務本部 本部長(現任) Ricoh Americas Holdings, Inc. 社長(現任) 2019年6月 当社 取締役(現任)	(注)3	-
取締役	志賀 こず江	1948年11月23日生	1967年11月 日本航空株式会社 入社 1993年4月 横浜地方検察庁検事 1998年4月 第一東京弁護士会登録 1999年8月 志賀法律事務所開設 2002年6月 サン総合法律事務所パートナー 2005年10月 白石総合法律事務所パートナー 2009年9月 株式会社東横イン 社外取締役(現任) 2010年6月 株式会社新生銀行 社外監査役 2015年6月 当社 取締役(現任) 特種東海製紙株式会社 社外取締役 2016年6月 川崎汽船株式会社 社外監査役(現任) 2019年1月 白石総合法律事務所オフ・カウンセラー(現任)	(注)3	-
取締役	瀬戸 薫	1947年11月16日生	1970年4月 大和運輸株式会社 入社 1999年6月 ヤマト運輸株式会社 取締役 2004年6月 同社 取締役常務執行役員 2006年6月 ヤマトホールディングス株式会社 代表取締役 社長執行役員 2011年4月 同社 代表取締役会長 2015年4月 同社 取締役相談役 2016年6月 当社 取締役(現任) ヤマトホールディングス株式会社 相談役 2018年6月 日本電気株式会社 社外取締役(現任) ヤマトホールディングス株式会社 特別顧問(現任)	(注)3	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	二宮 雅也	1952年2月25日生	1974年4月 日本火災海上保険株式会社 入社 2005年6月 日本興亜損害保険株式会社 取締役常務執行役員 2009年6月 同社 代表取締役専務執行役員 2011年6月 同社 代表取締役社長社長執行役員 NKSJホールディングス株式会社(現SOMPOホールディングス株式会社) 取締役 2012年4月 同社 代表取締役会長会長執行役員 2014年9月 損害保険ジャパン日本興亜株式会社 代表取締役社長社長執行役員 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社(現SOMPOホールディングス株式会社)代表取締役会長会長執行役員 2015年4月 同社 代表取締役会長 2015年6月 同社 取締役会長 2016年4月 損害保険ジャパン日本興亜株式会社 代表取締役会長 2018年4月 同社 取締役会長(現任) 2018年6月 当社 取締役(現任) 2018年7月 一般財団法人日本民間公益活動連携機構 理事長(現任)	(注)3	-
取締役	荒川 正子	1971年1月1日生	1993年4月 株式会社長銀総合研究所 入社 (現 株式会社価値総合研究所) 2000年2月 不動産鑑定士登録 2006年3月 ドイツ銀行 東京支店 不動産ファイナンス部 Vice President 2010年7月 シービーアールイー株式会社 新規事業開発室 Executive Director 2012年10月 株式会社エーエムシーアドバイザーズ 代表取締役(現任) 2013年1月 街アセットマネジメント株式会社 代表取締役 2016年9月 株式会社ウィズダムアカデミー 社外取締役(現任) 2017年5月 株式会社ジーフット 社外取締役(現任) 2018年2月 一般社団法人実践コーポレートガバナンス研究会 理事(現任) 2019年6月 当社 取締役(現任)	(注)3	-
監査役 (常勤)	石黒 一也	1961年11月25日生	1985年3月 株式会社リコー入社 2008年10月 リコー中国株式会社(現リコージャパン株式会社)取締役 同社 執行役員 同社 経営企画室長 2011年4月 株式会社リコー 経理本部 財務部長 2014年4月 当社 入社 当社 理事 2014年6月 当社 監査役(現任)	(注)5	200
監査役 (非常勤)	百武 直樹	1954年5月8日生	1977年4月 麒麟麦酒株式会社入社 2011年3月 キリンホールディングス株式会社 常勤監査役 2013年1月 キリン株式会社 監査役 2016年6月 当社 監査役(現任)	(注)5	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
監査役 (非常勤)	徳嶺 和彦	1958年1月11日生	1993年4月 東京弁護士会登録 1996年4月 徳嶺法律事務所開設 2009年4月 アサヒホールディングス株式会社 社外 監査役 2015年6月 アサヒホールディングス株式会社 社外 取締役(監査等委員) 2016年6月 当社 監査役(現任)	(注)4	300
計					14,150

- (注) 1. 取締役 志賀こず江、瀬戸薫、二宮雅也及び荒川正子は、社外取締役であります。
2. 監査役 百武直樹及び徳嶺和彦は、社外監査役であります。
3. 2019年6月19日選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時
4. 2018年6月15日選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時
5. 2016年6月15日選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時
6. 当社は、法令に定める監査役の数に欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (株)
土居 伸一郎	1961年11月2日生	1990年4月 東京外語ビジネス専門学校 外部講師 2004年4月 東京都立大学法科大学院入学 2006年3月 東京都立大学法科大学院卒業 2007年9月 司法試験合格 2009年9月 東京弁護士会登録 小林法律事務所入所 2014年8月 コスモ法律会計事務所開設 (現在に至る)	-

7. 当社では、取締役の役割と業務執行責任の明確化を目指した執行役員制度を導入しております。執行役員は13名からなり、主要担当職務は以下のとおりであります。

社長執行役員 瀬川 大介
 常務執行役員 眞鍋 求 テクノレント株式会社 代表取締役 社長執行役員
 常務執行役員 中村 徳晴 業務統括本部長
 常務執行役員 佐野 弘純 営業統括本部長
 常務執行役員 川口 俊 本社統括本部長
 執行役員 武藤 裕文 BPT本部長
 執行役員 高木 明人 テクノレント株式会社 取締役 副社長執行役員
 執行役員 黒木 伸一 ソーシャルイノベーション第一本部長
 執行役員 松上 恵美 FFP R推進本部長
 執行役員 黒川 憲司 エリア営業本部 副本部長 兼 首都圏支社長
 執行役員 阿部 一哉 審査本部長
 執行役員 荒木 優一 人財本部長
 執行役員 井野 昇一 ソーシャルイノベーション第二本部長

社外役員の状況

当社は、社外役員(社外取締役及び社外監査役)又は社外役員候補者が次の各項目の何れにも該当しない場合に独立性を有しているものと判断し、社外取締役4名及び社外監査役2名を選任しております。

- ・現在および過去10年間に於いて、当社または関連会社の業務執行者
- ・現在および過去3年間に於いて、当社の主要な取引先(相互の連結売上高の2%以上)、またはその業務執行者
- ・現在および過去3年間に於いて、当社から役員報酬以外に多額(年間100万円以上)の金銭その他の財産を得ているコンサルタント、会計専門家または法律専門家(当該財産を得ている者が法人、組合等の団体である場合は、当該団体に所属する者をいう。)
- ・現在において、当社の主要株主(10%以上の議決権を直接または間接に保有している者)、またはその業務執行者
- ・当社から多額(年間100万円以上)の寄付を受けている者、またはその業務執行者
- ・当社グループの会計監査人である監査法人に所属する公認会計士

志賀こず江氏を社外取締役とした理由は、弁護士としての専門的な経験と知識、および上場会社の社外役員としての豊富な経験と見識を備えており、企業経営者とは異なる多角的な観点等からの意見・提言をいただけるものと判断したためであります。なお、同氏は社外取締役及び社外監査役になる以外の方法で直接企業経営に関与された経験はありませんが、上記の理由により、社外取締役の職務を適切に遂行していただけるものと判断しております。

瀬戸薫氏を社外取締役とした理由は、ヤマトホールディングス株式会社での経営者としての豊富な経験により、企業経営にかかる幅広い知識と高い見識を備えており、業務執行を適切に監督いただけるものと判断したためであります。

二宮雅也氏を社外取締役とした理由は、損害保険ジャパン日本興亜株式会社での経営者として豊富な経験により、企業経営にかかる幅広い知識と高い見識を備えており、業務執行を適切に監督いただけるものと判断したためであります。

荒川正子氏を社外取締役とした理由は、不動産ビジネスにより培われた豊富な経験と高い専門性に加え、上場会社の社外取締役の経験やコーポレートガバナンスについての高い見識を備えており、業務執行を適切に監督いただけるものと判断したためであります。

百武直樹氏を社外監査役とした理由は、キリンホールディングス株式会社の常勤監査役を務め、現在は日本監査役協会の監査実務相談員として活躍される等、豊富な経験と高い見識を有しており、客観的かつ公正な立場で取締役の職務を監査できると判断したためであります。

徳嶺和彦氏を社外監査役とした理由は、弁護士及び当社社外監査役、他の企業での社外取締役、社外監査役としての経験・知識を有し、専門的見地から、客観的かつ公正な立場での取締役の職務を監督できると判断したためであります。なお、同氏は、直接企業経営に関与された経験はありませんが、上記の理由により、引き続き、社外監査役の職務を遂行していただけるものと判断しております。

志賀氏、瀬戸氏、二宮氏、荒川氏、百武氏、徳嶺氏いずれも当社との間には人的関係、資本的関係、又は取引関係その他の利害関係はなく、東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。なお、社外役員の保有株式数は役員の状況に記載の通りであります。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、取締役会において、業務の執行について監督しております。客観的・中立的な立場から、経営の透明性と公正な意思決定をより強化する役割を担っております。一方、社外監査役は、取締役会の審議を通して取締役の職務執行を監視するとともに、個別監査内容、内部監査部門による業務監査、内部統制の整備・運用状況の報告、及び監査法人からの監査概要報告を受けております。経験及び専門的知見等を基に独立性の高い立場から、経営の健全性をより強化する役割を担っております。また、社外取締役及び社外監査役はそれぞれ専門的見地から、あるいは連携して、適宜質問や助言を行っております。

(3)【監査の状況】

内部監査及び監査役監査の状況

内部監査は内部監査部門が行っており、人員は4名であります。内部監査は全部門を対象とし社内規程に定めた手順、方法により実施しております。内部監査の実施状況は、社長執行役員及び監査役に報告され必要に応じて改善指示を行っております。また、内部統制システムの整備運用の実施状況に関する評価を取締役会及び監査役へ報告し、必要に応じて整備の指示を行っております。

監査役は、取締役会、経営会議、その他重要な会議に出席するほか、取締役・執行役員からの職務執行状況の聴取、重要な決裁書類等の閲覧を通じて取締役等の職務執行状況の監査を行うとともに、会社法に基づく内部統制システムの整備運用状況についても内部監査部門と協働して厳正な監査を実施しております。また、監査役は内部監査部門から内部監査の結果の報告を受けるとともに、内部監査部門の職務執行状況を監査し、相当性を検証するとともに、定期及び随時に会合をもち意思疎通を図っております。監査役は、監査法人から監査方法及び監査結果の報告をうけ、その相当性について検証するとともに、定期的に、その他必要に応じて随時情報交換を行っております。常勤監査役石黒一也は、他の複数のリコーグループ会社において、取締役として、また経営企画・経営管理部門の責任者として経営に携わり、事業経営全般にわたる知識・経験が豊富であり、監査役に期待される相当程度の知見を有しております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任 あずさ監査法人

b. 業務を執行した公認会計士

林 秀行
高津 知之

c. 監査業務に係る補助者の構成

会計監査業務に係る補助者は、公認会計士6名、その他14名であります。

なお、継続監査年数については、全員7年以内のため記載を省略しております。

d. 監査法人の選定方針と選定した理由

監査役会は会計監査人の解任または不再任の決定の方針を次のように定めております。

< 会計監査人の解任または不再任の決定の方針 >

会計監査人が会社法第340条第1項各号のいずれかに該当すると判断した場合に、監査役会は監査役全員の同意によって会計監査人を解任いたします。この場合、解任及びその理由を解任後最初に招集される株主総会において報告いたします。

また、上記のほか、会計監査人による適正な職務の執行が困難であると認められる場合、または監査の信頼性、適正性を高めるために会計監査人の変更が妥当であると判断した場合には、監査役会は、株主総会に提出する会計監査人の解任または不再任に関する議案の内容を決定いたします。

監査役会は、「会計監査人の解任または不再任の決定の方針」に基づく「会計監査人の再任判断基準」に照らし、以下を確認しました。

- ・会社法第340条第1項の各号に該当する事項の有無
- ・会計監査人として適正な職務の遂行の可否(品質管理体制、監査チームの体制、監査報酬等)

その結果、会計監査人の監査の方法と結果を相当と認め、当監査役会は有限責任あずさ監査法人を再任することが適当であると判断いたしました。

e. 監査法人の異動

該当事項はありません。

なお、2019年6月19日に開催した第43回定時株主総会において、会計監査人選任の件を議案として諮り、有限責任監査法人トーマツを第44期(2019年度)の当社の会計監査人とすることが承認可決され、次のとおり異動しております。

第43期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）（連結・個別）有限責任あずさ監査法人
第44期（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）（連結・個別）有限責任監査法人トーマツ

臨時報告書に記載した事項は次のとおりです。

1 [提出理由]

当社は、2019年5月9日開催の監査役会において、金融商品取引法第193条の2第1項及び第2項の監査証明を行う監査公認会計士等の異動を行うことについて決議するとともに、同日に開催された取締役会において、当該議案を同年6月19日開催予定の第43回定時株主総会に付議することを決議いたしましたので、金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の4の規定に基づき、本臨時報告書を提出するものであります。

2 [報告内容]

(1) 異動に係る監査公認会計士等の名称

選任する監査公認会計士等の名称

有限責任監査法人トーマツ

退任する監査公認会計士等の名称

有限責任あずさ監査法人

(2) 異動の年月日

2019年6月19日

(3) 退任する監査公認会計士等が直近において監査公認会計士等となった年月日

2018年6月15日

(4) 退任する監査公認会計士等が直近3年間に作成した監査報告書等における意見等に関する事項

該当事項はありません。

(5) 異動の決定又は異動に至った理由及び経緯

当社の会計監査人である有限責任あずさ監査法人は、2019年6月19日開催予定の第43回定時株主総会の終結の時をもって任期満了となります。

これに伴い、当社監査役会は、現会計監査人が長年にわたって監査を継続していることから、新しい会計監査人の起用による新たな視点での監査、及び、親会社である株式会社リコーと会計監査人を統一することによる効率的な監査を期待し、有限責任監査法人トーマツの専門性、独立性、適切性、及び品質管理体制について総合的に検討した結果、同監査法人を新たな会計監査人として選任する議案の内容を決定したものであります。

(6) 上記(5)の理由及び経緯に対する監査報告書等の記載事項に係る退任する監査公認会計士等の意見

特段の意見はない旨の回答を得ております

f. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役会が定めた評価基準に即して監査法人の評価を実施しました。評価基準の各項目は次の通りです。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ・ 欠格事由（会社法第340条第1項） | ・ 監査方針、監査計画 |
| ・ 監査法人の品質管理体制 | ・ 監査役等とのコミュニケーション |
| ・ 監査チームの体制 | ・ 経営者等との関係 |
| ・ 監査報酬等 | ・ 不正リスク対応 |

監査報酬の内容

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（2019年1月31日内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) から の規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	43	4	44	4
連結子会社	-	-	-	-
合計	43	4	44	4

当社における前連結会計年度及び当連結会計年度の非監査業務の内容は、公認会計士法第2条第1項の業務以外である社債発行に伴うコンフォートレター作成であります。

b. その他重要な報酬の内容

該当事項はありません。

c. 監査報酬の決定方針

当社は、監査報酬の検討に際して、当社の事業規模や業務特性に応じた適正な監査時間について監査公認会計士等と十分な検討を行っており、また監査公認会計士等の独立性の確保に留意しております。

d. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算出根拠などが適切であるかどうかについて必要な検証を行ったうえで、会計監査人の報酬等の額について同意の判断をいたしました。

(4) 【役員の報酬等】

役員報酬等の内容

1) 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

イ. 報酬の基本方針

当社および当社グループの企業価値（株主価値）の増大に向けて、中長期に亘って持続的な業績向上を実現することに対する有効なインセンティブとして、取締役報酬を位置付けており、コーポレートガバナンス強化の観点から、以下の方針に基づいて報酬を決定しております。

- ・取締役任期に期待される役割、責任に応じた報酬体系を構築する。
- ・会社業績や企業価値（株主価値）を高め、株主と利害を共有できる報酬とする。
- ・優秀な人材を登用（採用）・確保できる報酬水準を確保する。
- ・株主をはじめとするステークホルダーに対し説明責任を果たすため、報酬決定のプロセスについて客観性・透明性・妥当性の確保を図る。

ロ. 報酬体系

取締役報酬は、固定報酬、単年度業績連動賞与（短期インセンティブ）、株式報酬（中長期インセンティブ）で構成されており、総報酬に占める単年度業績連動賞与と株式報酬の合計額の比率は50%程度を目安としております。なお、社外取締役の報酬は、適切に監督を行う役割と独立性の観点から、固定報酬のみとしております。

- ・固定報酬は、取締役の役割と責任の重さに基づき決定しております。
- ・単年度業績連動賞与は、当該事業年度の業績向上の取り組み成果を反映させるという考え方にに基づき、当該事業年度の連結営業利益とその計画達成率により算出し、各取締役の役位や職務遂行状況の結果を加味して決定しております。

当事業年度における業績連動賞与に係る指標の目標及び実績

項目	目標	実績
連結営業利益	17,000百万円	17,276百万円
営業利益計画達成率	-	101.6%

- ・株式報酬は、取締役の報酬と当社の株式価値との連動性をより明確にし、取締役が株価の変動による利益・リスクを株主の皆様と共有することで、中長期的な業績の向上と企業価値の増大に貢献する意識を高めることを目的として、2019年6月開催の第43回定時株主総会の決議により導入することを決定しました。当社が金銭を拠出することにより設定する信託が、当社株式を取得し、当社が各取締役に付与するポイントの数に相当する数の当社株式が本信託を通じて各取締役に交付される制度です。各取締役に付与されるポイントは、取締役会で定める「株式交付規程」に基づき、役位及び業績目標（連結営業利益等）の達成度等に応じて付与します。

取締役の報酬限度額は、2019年6月開催の定時株主総会において年額260百万円以内（うち社外取締役分は年額40百万円以内）と決議いただいております。また、株式報酬については、これとは別枠に、2019年6月開催の定時株主総会において、信託期間（5年間）中に拠出する1事業年度あたりの金銭の上限を60百万円、1事業年度あたりに付与されるポイント総数の上限を30,000ポイントと決議いただいております。

八．決定手続

取締役報酬決定についての客観性・透明性・妥当性の確保を図ることを目的に、社外取締役を委員長とする、指名報酬委員会を設置しております。同委員会は取締役会の諮問機関として位置づけられており、社外取締役全員と社長執行役員である代表取締役で構成されております。取締役の報酬は、同委員会において、取締役の報酬制度や報酬水準が上記方針に沿ったものであるかを審議し、その結果を踏まえて、取締役会において決定しております。

なお、当事業年度では、株式報酬制度の導入、単年度業績連動賞与の決定および取締役報酬額の改定について、外部機関のデータを活用した役員報酬水準等の検証結果に基づき、指名報酬委員会において審議を行い、取締役会に答申いたしました。取締役会はその答申内容を受けて審議・決定しております。

2) . 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)			対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	単年度業績 連動賞与	自社株式 取得報酬	
取締役 (社外取締役を除く。)	150	78	56	15	5
監査役 (社外監査役を除く。)	15	15	-	-	1
社外役員	30	30	-	-	5

(注) 自社株式取得報酬は、証券会社が提供する累積投資制度を活用し、自社株式を取得できる仕組みです。

3) 報酬等の総額が1億円以上である者の連結報酬等の総額等

該当事項はありません。

4) 従業員兼務役員の従業員分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする投資を純投資目的の投資株式とし、それ以外を純投資目的以外の投資株式としております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針および保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証内容

当社が持続的に成長していくため、事業戦略上の必要や取引先との関係強化などを通じ、当社の企業価値増大に資すると認められる株式について保有しております。保有株式は年に一度、個別銘柄毎に、保有することによる関連収益及び事業上の便益を検証の上、保有継続の是非を決定し、保有の意義が消失または薄れたと判断された株式は速やかに適切な方法で売却、処分しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	2	630
非上場株式以外の株式	5	2,572

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	1	300	新規出資のため
非上場株式以外の株式	-	-	-

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	1	99
非上場株式以外の株式	1	41

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
 特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
コカ・コーラボト ラーズジャパン(株)	384,248	384,248	取引関係の維持・強化	有
	1,080	1,688		
(株)C a s a	800,000	400,000	取引関係の維持・強化 株式分割によるもの	無
	845	870		
(株)ブロードリーフ	898,800	449,400	取引関係の維持・強化 株式分割によるもの	無
	523	475		
スタンレー電気(株)	21,000	21,000	取引関係の維持・強化	有
	62	82		
ウシオ電機(株)	47,166	47,166	取引関係の維持・強化	無
	60	67		
G - F A C T O R Y (株)	-	50,000	取引関係の維持・強化	無
	-	40		

(注) 定量的保有効果につきましては、守秘義務等の観点から記載が困難であるため、記載しておりません。

保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並びに当
 事業年度における受取配当金、売却損益及び評価損益の合計額

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	-	-	1	0
非上場株式以外の株式	1	40	2	2

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額(百万円)	売却損益の 合計額(百万円)	評価損益の 合計額(百万円)
非上場株式	-	-	(注)
非上場株式以外の株式	0	1	-

(注) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、
 「評価損益の合計額」は記載しておりません。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表及び第43期事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表について有限責任あずさ監査法人により監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、開示書類作成等の各種セミナーに参加しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,833	2,119
受取手形及び売掛金	3,14	3,14
割賦債権	2,123,972	2,148,962
未収賃貸債権	37,928	36,238
リース債権及びリース投資資産	2,551,398	2,565,113
営業貸付金	143,787	160,627
その他の営業貸付債権	45,726	49,637
その他の営業資産	4,505,058	4,503,037
賃貸料等未収入金	6,794	7,553
その他	23,860	22,939
貸倒引当金	7,805	7,875
流動資産合計	933,568	990,369
固定資産		
有形固定資産		
賃貸資産		
賃貸資産	1,24,101	1,34,633
賃貸資産合計	24,101	34,633
社用資産		
社用資産	1,499	1,4,631
社用資産合計	499	4,631
有形固定資産合計	24,601	39,264
無形固定資産		
賃貸資産	1,045	1,013
その他の無形固定資産	1,245	1,371
無形固定資産合計	2,290	2,385
投資その他の資産		
投資有価証券	5,293	5,308
破産更生債権等	945	592
繰延税金資産	1,241	1,344
その他	1,630	1,953
貸倒引当金	619	540
投資その他の資産合計	8,490	8,658
固定資産合計	35,381	50,309
資産合計	968,950	1,040,678

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	3 20,298	3 23,231
短期借入金	111,045	56,292
1年内償還予定の社債	20,000	30,000
1年内返済予定の長期借入金	75,725	104,472
コマーシャル・ペーパー	-	40,000
支払引受債務	30,500	32,920
リース債務	35	9
未払法人税等	2,854	2,898
賞与引当金	832	969
役員賞与引当金	48	56
賃貸料等前受金	3,714	4,071
割賦未実現利益	12,659	15,799
その他	17,068	20,862
流動負債合計	294,783	331,585
固定負債		
社債	125,000	125,000
長期借入金	374,911	399,438
リース債務	143	132
退職給付に係る負債	1,060	1,083
受取保証金	7,021	8,886
その他	139	102
固定負債合計	508,276	534,643
負債合計	803,059	866,229
純資産の部		
株主資本		
資本金	7,896	7,896
資本剰余金	10,160	10,160
利益剰余金	146,055	155,657
自己株式	48	48
株主資本合計	164,064	173,665
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	1,349	1,084
退職給付に係る調整累計額	314	300
その他の包括利益累計額合計	1,034	783
非支配株主持分	791	-
純資産合計	165,890	174,449
負債純資産合計	968,950	1,040,678

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	304,341	313,957
売上原価	273,081	281,013
売上総利益	31,260	32,943
販売費及び一般管理費		
支払手数料	2,998	3,240
従業員給料及び手当	3,998	4,161
賞与引当金繰入額	832	922
貸倒引当金繰入額	1,550	1,635
その他	5,329	5,705
販売費及び一般管理費合計	14,708	15,667
営業利益	16,552	17,276
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	32	53
投資有価証券売却益	20	30
投資事業組合運用益	53	139
その他	21	60
営業外収益合計	126	284
営業外費用		
支払利息	10	10
社債発行費	214	115
その他	38	50
営業外費用合計	263	177
経常利益	16,415	17,383
税金等調整前当期純利益	16,415	17,383
法人税、住民税及び事業税	5,052	5,324
法人税等調整額	53	14
法人税等合計	4,999	5,338
当期純利益	11,416	12,045
非支配株主に帰属する当期純利益	110	101
親会社株主に帰属する当期純利益	11,306	11,943

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	11,416	12,045
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	479	265
退職給付に係る調整額	25	13
その他の包括利益合計	1,505	1,251
包括利益	11,921	11,793
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	11,814	11,691
非支配株主に係る包括利益	107	101

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,896	10,160	136,778	48	154,787
当期変動額					
剰余金の配当			2,029		2,029
親会社株主に帰属する当期純利益			11,306		11,306
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	9,277	0	9,276
当期末残高	7,896	10,160	146,055	48	164,064

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	867	340	526	683	155,998
当期変動額					
剰余金の配当					2,029
親会社株主に帰属する当期純利益					11,306
自己株式の取得					0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	482	25	508	107	615
当期変動額合計	482	25	508	107	9,892
当期末残高	1,349	314	1,034	791	165,890

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,896	10,160	146,055	48	164,064
当期変動額					
剰余金の配当			2,341		2,341
親会社株主に帰属する当期純利益			11,943		11,943
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	9,602	0	9,601
当期末残高	7,896	10,160	155,657	48	173,665

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	1,349	314	1,034	791	165,890
当期変動額					
剰余金の配当					2,341
親会社株主に帰属する当期純利益					11,943
自己株式の取得					0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	265	13	251	791	1,042
当期変動額合計	265	13	251	791	8,559
当期末残高	1,084	300	783	-	174,449

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	16,415	17,383
賃貸資産減価償却費	9,275	10,913
社用資産減価償却費及び除却損	738	760
貸倒引当金の増減額(は減少)	22	9
賞与引当金の増減額(は減少)	52	137
役員賞与引当金の増減額(は減少)	12	8
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	75	42
受取利息及び受取配当金	32	53
資金原価及び支払利息	1,097	1,034
社債発行費	214	115
投資事業組合運用損益(は益)	53	139
割賦債権の増減額(は増加)	15,499	21,849
未収賃貸債権の増減額(は増加)	92	1,689
リース債権及びリース投資資産の増減額(は増加)	13,369	13,715
営業貸付金の増減額(は増加)	14,569	16,840
その他の営業貸付債権の増減額(は増加)	1,688	3,911
賃貸料等未収入金の増減額(は増加)	583	759
賃貸資産の取得による支出	15,400	21,957
仕入債務の増減額(は減少)	6,570	2,932
破産更生債権等の増減額(は増加)	259	353
その他	5,489	10,080
小計	30,644	33,784
利息及び配当金の受取額	32	53
利息の支払額	1,140	1,026
法人税等の支払額	4,884	5,110
営業活動によるキャッシュ・フロー	36,636	39,867
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券及び投資有価証券の取得による支出	1,028	983
社用資産の取得による支出	543	5,414
その他	238	378
投資活動によるキャッシュ・フロー	1,333	6,018
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	1,070	54,752
コマーシャル・ペーパーの純増減額(は減少)	-	40,000
長期借入れによる収入	114,000	129,000
長期借入金の返済による支出	97,942	75,725
社債の発行による収入	54,785	29,884
社債の償還による支出	30,000	20,000
自己株式の取得による支出	0	0
子会社の自己株式の取得による支出	-	892
配当金の支払額	2,029	2,341
財務活動によるキャッシュ・フロー	37,742	45,171
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	228	714
現金及び現金同等物の期首残高	3,061	2,833
現金及び現金同等物の期末残高	2,833	2,119

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 3社

主要な連結子会社の名称

テクノレント(株)

東京ビジネスレント(株)

R L 御殿場エナジー(同)

当連結会計年度より、新規設立したRL御殿場エナジー合同会社を連結の範囲に含めております。また、清算終了したリクレス債権回収株式会社を連結の範囲から除外しております。

(2) 非連結子会社はありません。

2. 持分法の適用に関する事項

持分法の適用となる関連会社はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

a. その他の有価証券

・時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)によっております。

・時価のないもの

移動平均法による原価法によっております。

なお、投資事業有限責任組合に類する組合への出資(金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの)については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

デリバティブ取引

時価法によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産

a. 賃貸資産

・リース資産

主にリース期間を償却年数とし、リース期間満了時の処分見積価額を残存価額とする定額法によっております。

・レンタル資産

経済的、機能的な実情を勘案した合理的な償却年数に基づく定額法によっております。なお、主なレンタル資産である事務用機器の償却年数は2～5年であります。

b. 社用資産

主に定率法によっております。ただし、2016年4月1日以降に取得の建物附属設備については定額法によっております。

主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 10年～15年

機械及び装置 15年～20年

車両運搬具 5年～6年

器具備品 3年～6年

無形固定資産

a. 賃貸資産

リース期間を償却年数とし、リース期間満了時の処分見積価額を残存価額とする定額法によっております。

b. ソフトウェア

自社利用のソフトウェアは、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法によっております。

(3)重要な繰延資産の処理方法

社債発行費については支出時に全額費用処理しております。

(4)重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率、貸倒懸念債権及び破産更生債権については財務内容評価法によっております。

賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、支給見積額のうち、当連結会計年度に対応する負担額を計上しております。

役員賞与引当金

役員の賞与の支給に備えるため、当連結会計年度末における支給見込額を計上しております。

(5)退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（12年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（12年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日連結会計年度から費用処理しております。

(6)重要な収益及び費用の計上基準

ファイナンス・リース取引に係る売上高及び売上原価の計上基準

リース料を収受すべき時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。

(7)重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

当社のヘッジ会計の方法は、当社の一部の資産・負債について、繰延ヘッジ、あるいは特例処理の要件を満たす金利スワップ取引については、特例処理によっており、一体処理（特例処理、振当処理）の要件を満たす金利通貨スワップ取引については、一体処理によっております。

ヘッジ手段とヘッジ対象

a. ヘッジ手段

金利スワップ取引及び金利オプション取引、通貨スワップ取引

b. ヘッジ対象

借入金、社債、営業貸付金等

ヘッジ方針

当社は、長期確定の運用取引であるリース事業が中心であるため、このリース資産購入のために調達する資金の変動金利支払に対して、金利変動リスクを一定、またはある範囲内に限定するヘッジ目的で、金利スワップ・金利オプション・通貨スワップを利用しております。

ヘッジ有効性評価の方法

特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

その他

当社のデリバティブ取引は、社内規程に基づき厳格に執行・管理されております。デリバティブ取引は経営管理本部が行っており、社内規程の範囲内で担当執行役員が承認権限を有しております。

デリバティブ取引の取組状況や評価損益・リスク量等については、毎月経営者層で構成されるALM委員会に報告しております。

内部管理体制については、経営管理本部内において執行担当者と事務管理担当者の分離を明確にしております。事務管理担当者は、取引の都度、執行担当者からの取引報告と契約先から直接送付されてくる明細を照合し、取引内容の確認を行っております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクしに負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

未収賃貸債権

新たなリース契約の締結に伴う旧リース物件の合意解約時における債権残高は、未収賃貸債権として表示しております。なお、当該債権額は新リース契約の期間にわたって回収されます。

その他の営業貸付債権及び支払引受債務

その他の営業貸付債権及び支払引受債務は、ファクタリングに係る未収金及び未払金であります。

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会(IASB)及び米国財務会計基準審議会(FASB)は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

適用時期については、現在検討中です。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結貸借対照表)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を当連結会計年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」1,138百万円は「投資その他の資産」の「繰延税金資産」に組替えた後に、「固定負債」の「繰延税金負債」408百万円と相殺表示しております。

(連結貸借対照表関係)

1 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
賃貸資産	30,221百万円	32,127百万円
社用資産	1,684百万円	1,699百万円

2 リース・割賦販売契約等に基づく預り手形

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
リース債権及びリース投資資産	1,089百万円	1,150百万円
割賦債権	5,382百万円	4,397百万円

3 連結会計年度末日満期手形の会計処理

連結会計年度末日満期手形の会計処理については、受取手形については手形交換日をもって決済処理をしており、支払手形については満期日に決済が行われたものとして処理しております。当連結会計年度末日満期手形の金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	3百万円	1百万円
支払手形	199百万円	1,107百万円

4 リース債権流動化に伴う劣後信託受益権であります。

5 当社グループは、運転資金の効率的な調達を行うため取引金融機関20社と当座貸越契約及び貸出コミットメント契約を締結しております。これらの契約に基づく連結会計年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額及び貸出コミットメントの総額	138,500百万円	138,500百万円
借入実行残高	-百万円	-百万円
差引額	138,500百万円	138,500百万円

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金:		
当期発生額	713百万円	378百万円
組替調整額	20	10
税効果調整前	693	388
税効果額	213	123
その他有価証券評価差額金	479	265
退職給付に係る調整額		
当期発生額	33	37
組替調整額	72	57
税効果調整前	39	19
税効果額	13	6
退職給付に係る調整額	25	13
その他の包括利益合計	505	251

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自2017年4月1日 至2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	31,243,223	-	-	31,243,223
合計	31,243,223	-	-	31,243,223
自己株式				
普通株式	26,592	141	-	26,733
合計	26,592	141	-	26,733

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加141株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年6月14日 定時株主総会	普通株式	936	30.0	2017年3月31日	2017年6月15日
2017年10月20日 取締役会	普通株式	1,092	35.0	2017年9月30日	2017年12月4日

(2) 基準日が当期に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月15日 定時株主総会	普通株式	1,092	利益剰余金	35.0	2018年3月31日	2018年6月18日

当連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数（株）	当連結会計年度 増加株式数（株）	当連結会計年度 減少株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	31,243,223	-	-	31,243,223
合計	31,243,223	-	-	31,243,223
自己株式				
普通株式	26,733	87	-	26,820
合計	26,733	87	-	26,820

（注）普通株式の自己株式の株式数の増加87株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項
 該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2018年6月15日 定時株主総会	普通株式	1,092	35.0	2018年3月31日	2018年6月18日
2018年10月25日 取締役会	普通株式	1,248	40.0	2018年9月30日	2018年12月3日

(2) 基準日が当期に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年6月19日 定時株主総会	普通株式	1,248	利益剰余金	40.0	2019年3月31日	2019年6月20日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

前連結会計年度 （自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）	当連結会計年度 （自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
現金及び現金同等物の期末残高は、 連結貸借対照表の現金及び預金と同 額であります。	同左

(リース取引関係)

(貸主側)

1. ファイナンス・リース取引

(1) リース投資資産の内訳

流動資産

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
リース料債権部分	553,742	569,435
見積残存価額部分	1,050	1,154
受取利息相当額	43,257	44,825
リース投資資産	511,535	525,764

(注) 転リース取引に係る金額を除いて記載しております。

(2) リース債権及びリース投資資産に係るリース料債権部分の連結決算日後の回収予定額

流動資産

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース債権	15,373	10,736	6,483	4,574	2,116	3,003
リース投資資産	170,922	139,020	103,688	67,724	31,863	40,523

なお、リース取引開始日が、会計基準適用初年度開始前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、会計基準適用初年度の前年度末における固定資産の適正な帳簿価額(減価償却累計額控除後)をリース投資資産の期首の価額として計上しており、また当該リース投資資産に関して、会計基準適用後の残存期間においては、利息相当額の総額をリース期間中の各期に定額で配分しております。このため、リース取引開始日に遡及してリース会計基準を適用した場合に比べて、税金等調整前当期純利益が16百万円多く計上されております。

(単位：百万円)

	当連結会計年度 (2019年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース債権	15,406	10,047	6,896	4,388	2,288	2,563
リース投資資産	173,450	141,664	106,395	69,150	33,868	44,905

なお、リース取引開始日が、会計基準適用初年度開始前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、会計基準適用初年度の前年度末における固定資産の適正な帳簿価額(減価償却累計額控除後)をリース投資資産の期首の価額として計上しており、また当該リース投資資産に関して、会計基準適用後の残存期間においては、利息相当額の総額をリース期間中の各期に定額で配分しております。このため、リース取引開始日に遡及してリース会計基準を適用した場合に比べて、税金等調整前当期純利益が11百万円多く計上されております。

(注) 上記の回収予定額は、転リース取引に係る金額を除いて記載しております。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(借主側)

未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	977	1,200
1年超	8,101	9,290
合計	9,079	10,491

(貸主側)

未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	4,316	5,304
1年超	14,671	17,641
合計	18,988	22,945

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、金融市場や金融機関から適時・適切な必要資金の調達を行い、リース・割賦取引及び営業貸付取引などの事業に使用しております。これらの事業に関して、適切なリスク管理に取り組み、リスクに見合った適正な利益のある契約を獲得して優良資産の維持・拡大に努める方針であります。デリバティブは、リスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針です。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

リース・割賦取引は法人との取引であり、かつ、長期の契約期間に渡り金額が確定した取引であります。このため、当該取引には顧客の信用リスクのほか、金利変動リスクがあります。

営業貸付取引には、住宅ローン、業界特化型融資（開業医向けのドクターサポートローン）、マイカーローン等の短期・長期の融資取引のほか、リコーグループ会社並びに一般事業会社との短期・長期の融資取引などがあります。営業貸付取引には顧客の信用リスクのほか、固定金利での契約によるものは金利変動リスクがあります。

その他の営業貸付債権及び支払引受債務は、リコーグループ会社とのファクタリング取引であり、主に4ヶ月以内に回収、支払いを行う短期の債権・債務であります。

投資有価証券は、有価証券の保有目的分類でいう「その他有価証券」に該当するものであり、市場価格の変動リスクがあります。

借入金、社債及びコマーシャル・ペーパーは、リース・割賦取引及び営業貸付取引等のフィナンシャルサービスを提供するための資金調達を目的としたものであります。変動金利による調達のほか、長期確定の運用に対する金利変動リスクをヘッジする目的で、契約期間にあわせた固定金利による調達も行っております。

デリバティブ取引は、価格変動・金利変動リスクをヘッジする目的で金利スワップ取引及び、通貨スワップ取引を行っております。保有する金利スワップ取引は、特例処理に該当する取引であり社債・長期借入金と一体として処理しております。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、前述の連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項(7) 重要なヘッジ会計の方法」をご参照ください。

(3) 金融商品に関するリスク管理体制

信用リスク（顧客への信用供与、信用状況のモニタリング等）の管理

当社は、社内規程によりリース・割賦取引及び営業貸付取引の信用供与（与信）権限が厳格に定められており、約40万社の中堅・中小企業のお客様との取引履歴を蓄積して独自の審査システムを構築し、信用リスクの定量的な把握・管理を行っております。また、1契約当たりの平均単価は約240万円と業界平均値より低く抑えることにより、信用リスクの小口分散化を図っています。

主要な取引先に関しては、定期的なモニタリングを行って財務状況等の悪化等を早期に把握するよう努め、債権の保全を図っております。営業取引における信用リスクを適切に管理するために「審査委員会」を設置し、貸倒れの分析及び対策の検討、特化分野の動向調査、審査方針の策定などにより適切な与信管理を実現しております。

デリバティブ取引については、信用リスクを軽減するために取引相手先を格付けの高い金融機関に限定しております。

市場リスク（金利等の変動リスク）の管理

当社では、運用資産と調達資金の金利変動リスクを適正に管理するため、「ALM委員会」を設置し、金融市場の動向や資産・負債の状況について分析・検討を行っております。ALM委員会で検討された財務戦略及び営業戦略は機動的に執行され、最適な調達・運用を実現しています。

デリバティブ取引の管理・執行は、社内規程に基づき実施されており、毎月のALM委員会において取引内容、時価等の報告が行われております。

投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握しております。

市場リスクに係る定量的情報は次のとおりです。

a. トレーディング目的の金融商品

トレーディング目的で保有する金融商品はありません。

b. トレーディング目的以外の金融商品

当社グループにおいて、主要なリスク変数である金利リスクの影響を受ける主たる金融商品は、「割賦債権」、「リース債権及びリース投資資産」、「未収貸債権」、「営業貸付金」、「借入金」、「社債」、「デリバティブ取引」で実際に実行している金利スワップ取引等であります。当社グループでは、これらの金融資産及び金融負債について継続的に一律の金利変動幅を適用し、時価に与える影響額を金利変動リスクの管理にあたっての定量的分析に利用しております。当該影響額は、対象の金融資産及び金融負債の残高を金利期日に応じて適切な期間に分解し、一定の金利変動幅を用いて算定しています。金利以外のすべてのリスク変数が一定であることを仮定し、2019年3月31日現在、指標となる金利が10ベース・ポイント（0.10%）上昇

したものと想定した場合には、時価は5億13百万円減少するものと把握しております（前連結会計年度は6億73百万円減少）。当該影響額は、金利を除くリスク変数が一定の場合を前提としており、金利とその他のリスク変数との相関を考慮しておりません。また、一律の変動幅を超える金利変動が生じた場合には、算定額を超える影響が生じる可能性があります。

資金調達に係る流動性リスク

当社は、経営管理本部が資金繰計画を策定・更新し、回収資金と資金の返済及び買掛金等の支払に係る期日管理を一括して執り行っており、手許流動性の維持・確保などにより流動性リスクを管理しております。流動性リスクの備えとして、当座貸越契約及び貸出コミットメント契約を締結しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価額に基づく価額のほか、市場価額がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件を採用することにより、当該価額が変動することがあります。また、後述の注記事項に記載されている「デリバティブ取引関係」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（注2）参照）。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	連結貸借対照表 計上額（百万円）	時価 （百万円）	差額 （百万円）
(1) 割賦債権(*1)	111,313		
貸倒引当金(*2)	938		
(2) 未収賃貸債権	110,375	115,018	4,643
リース債権及びリース投資資産(*3)	37,928		
その他の営業資産	550,348		
貸倒引当金(*2)	5,058		
(3) 営業貸付金	588,214	601,628	13,414
貸倒引当金(*2)	143,787		
(4) その他の営業貸付債権	142,545	143,377	832
(5) 投資有価証券	45,726	45,726	-
	2,988	2,988	-
資産計	888,849	908,739	18,890
(1) 短期借入金	111,045	111,045	-
(2) 1年内償還予定の社債	20,000	20,039	39
(3) 1年内返済予定の長期借入金	75,725	75,781	56
(4) 支払引受債務	30,500	30,500	-
(5) 社債	125,000	124,932	67
(6) 長期借入金	374,911	374,795	115
負債計	737,181	737,095	86
デリバティブ取引(*4)	-	-	-

*1. 割賦債権から割賦未実現利益を控除しております。

*2. 各項目の債権に対する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

*3. リース債権及びリース投資資産の残高 = 「リース債権及びリース投資資産」 - 「見積残存価額部分」

*4. 金利スワップの特例処理、金利通貨スワップの一体処理（特例処理、振当処理）によるものは、ヘッジ対象とされている社債・長期借入金と一体として処理されているため、その時価は社債・長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 割賦債権(*1)	133,163		
貸倒引当金(*2)	914		
(2) 未収賃貸債権	132,248	137,034	4,785
リース債権及びリース投資資産(*3)	36,238		
その他の営業資産	563,958		
貸倒引当金(*2)	5,037		
(3) 営業貸付金	600,157	611,979	11,822
貸倒引当金(*2)	160,627		
(4) その他の営業貸付債権	159,226	160,038	811
貸倒引当金(*2)	49,637		
(5) 投資有価証券	49,631	49,631	-
資産計	2,612	2,612	-
(1) 短期借入金	943,877	961,297	17,419
(2) 1年内償還予定の社債	56,292	56,292	-
(3) 1年内返済予定の長期借入金	30,000	30,007	7
(4) 支払引受債務	104,472	104,504	31
(5) コマーシャル・ペーパー	32,920	32,920	-
(6) 社債	40,000	40,000	-
(7) 長期借入金	125,000	125,070	70
負債計	399,438	399,860	422
デリバティブ取引(*4)	788,124	788,656	531
	-	-	-

*1. 割賦債権から割賦未実現利益を控除しております。

*2. 各項目の債権に対する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

*3. リース債権及びリース投資資産の残高 = 「リース債権及びリース投資資産」 - 「見積残存価額部分」

*4. 金利スワップの特例処理、金利通貨スワップの一体処理(特例処理、振当処理)によるものは、ヘッジ対象とされている社債・長期借入金と一体として処理されているため、その時価は社債・長期借入金の時価に含めて記載しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法、並びに、有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 割賦債権、並びに、(2) 未収賃貸債権、リース債権及びリース投資資産、その他の営業資産

これら時価の算出にあたっては、与信管理上区分している業種ごとに、新規に実行した場合に想定される利率で割り引いて現在価値を算定しております。当該債権に係る貸倒懸念債権については、時価は貸借対照表価額から貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額をもって時価としております。

(3) 営業貸付金

営業貸付金のうち、変動金利によるものは短期間で市場金利を反映するため、貸付先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似しているため当該帳簿価額としております。固定金利によるものは、貸付金の種類及び期間区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸付を行った場合に想定される利率で割り引いて現在価値を算出しております。貸倒懸念債権については、時価は貸借対照表価額から貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額をもって時価としております。

(4) その他の営業貸付債権

その他の営業貸付債権は、ファクタリング等における未収債権であり、短期間で決済される債権の時価は帳簿価額に近似していることから当該帳簿価額としております。

(5) 投資有価証券

投資有価証券の時価は、取引所の価額によっております。

負 債

(1) 短期借入金、並びに、(5) コマーシャル・ペーパー

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額としております。

(2) 1年内償還予定の社債、(3) 1年内返済予定の長期借入金、(6) 社債、並びに、(7) 長期借入金

社債・長期借入金のうち変動金利によるもの、また、金利スワップの特例処理又は金利通貨スワップの一体処理の対象とされ、当該金利スワップ取引又は金利通貨スワップと一体で変動金利となるものは、時価は帳簿価額と近似していると考えられることから当該帳簿価額としております。

固定金利によるものは元利金の合計額を、また、金利スワップの特例処理又は金利通貨スワップの一体処理の対象とされ、金利スワップ又は金利通貨スワップと一体で固定金利となるものは一体として処理された元利金の合計額を、残存期間及び調達コストを加味した利率で割り引いて現在価値を算定しております。

(4) 支払引受債務

支払引受債務はファクタリングの短期の未払金であり、短期間で決済される債務の時価は帳簿価額に近似していることから当該帳簿価額としております。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照下さい。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額(百万円)

区分	2018年3月31日	2019年3月31日
非上場株式	129	630
投資事業有限責任組合への出資	2,175	2,065

非上場株式、投資事業有限責任組合への出資については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(5) 投資有価証券」には含めておりません。

(注3) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
割賦債権	33,948	52,261	16,521	8,582
未収賃貸債権	11,562	26,035	330	-
リース債権及びリース投資資産	173,612	336,159	35,305	6,320
その他の営業資産	2,090	2,967	-	-
営業貸付金	15,562	48,426	24,866	54,932
その他の営業貸付債権	45,726	-	-	-
合計	282,502	465,850	77,023	69,834

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
割賦債権	39,401	59,987	22,427	11,346
未収賃貸債権	11,237	24,691	309	-
リース債権及びリース投資資産	175,932	343,677	38,091	7,412
その他の営業資産	2,024	3,012	-	-
営業貸付金	18,073	56,832	26,114	59,607
その他の営業貸付債権	49,637	-	-	-
合計	296,307	488,201	86,942	78,366

(注4) 社債、長期借入金及びその他有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	111,045	-	-	-	-	-
社債	20,000	30,000	45,000	30,000	10,000	10,000
長期借入金	75,725	104,072	98,498	120,040	16,000	36,300
合計	206,770	134,072	143,498	150,040	26,000	46,300

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	56,292	-	-	-	-	-
コマーシャル・ ペーパー	40,000	-	-	-	-	-
社債	30,000	45,000	50,000	10,000	10,000	10,000
長期借入金	104,472	98,498	120,640	82,500	46,500	51,300
合計	230,765	143,498	170,640	92,500	56,500	61,300

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

種類	連結貸借 対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原 価を超えるもの			
(1)株式	2,988	1,116	1,871
(2)債券	-	-	-
(3)その他	-	-	-
小計	2,988	1,116	1,871
連結貸借対照表計上額が取得原 価を超えないもの			
(1)株式	-	-	-
(2)債券	-	-	-
(3)その他	-	-	-
小計	-	-	-
合計	2,988	1,116	1,871

(注)非上場株式(連結貸借対照表計上額129百万円)、投資事業有限責任組合への出資(連結貸借対照表計上額2,175百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

種類	連結貸借 対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原 価を超えるもの			
(1)株式	2,612	1,103	1,508
(2)債券	-	-	-
(3)その他	-	-	-
小計	2,612	1,103	1,508
連結貸借対照表計上額が取得原 価を超えないもの			
(1)株式	-	-	-
(2)債券	-	-	-
(3)その他	-	-	-
小計	-	-	-
合計	2,612	1,103	1,508

(注)非上場株式(連結貸借対照表計上額630百万円)、投資事業有限責任組合への出資(連結貸借対照表計上額2,065百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	34	20	-
(2) 債券	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	34	20	-

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	43	30	-
(2) 債券	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	43	30	-

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1)通貨関連

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利通貨スワップ の一体処理(特例 処理・振当処理)	金利通貨スワップ 取引 米ドル変動受取・ 日本円固定支払	長期借入金	9,783	5,457	(注)
	米ドル固定受取・ 日本円固定支払		3,053	3,053	

(注)金利通貨スワップの一体処理(特例処理・振当処理)によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利通貨スワップ の一体処理(特例 処理・振当処理)	金利通貨スワップ 取引 米ドル変動受取・ 日本円固定支払	長期借入金	5,457	4,438	(注)
	米ドル固定受取・ 日本円固定支払		3,053	-	

(注)金利通貨スワップの一体処理(特例処理・振当処理)によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(2)金利関連

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特 例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支 払	社債・長期 借入金	98,100	66,100	(注)
	変動支払・固定受 取		89,500	89,500	

(注)金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている社債・長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該社債・長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特 例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支 払	社債・長期 借入金	66,100	36,600	(注)
	変動支払・固定受 取		99,500	79,500	

(注)金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている社債・長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該社債・長期借入金の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、退職給付制度として確定給付企業年金法に基づくキャッシュバランス制度を有しており、当社は、複数事業主制度であるリコーグループの企業年金に加入しております。

なお、当社は、2014年4月1日付で確定給付企業年金制度の一部と退職一時金制度を終了し確定拠出年金制度へ移行しております。

2. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度57百万円、当連結会計年度60百万円であります。

3. 確定給付制度(確定給付制度の会計処理を行う、複数事業主制度の企業年金制度を含む)

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	2,529百万円	2,612百万円
勤務費用	106	119
利息費用	11	9
数理計算上の差異の発生額	76	86
退職給付の支払額	111	147
退職給付債務の期末残高	2,612	2,679

(注) 1. 一部の連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり、簡便法を採用しております。

2. 執行役員退職慰労引当金を連結貸借対照表上、退職給付に係る負債に含めて表示しております。

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	1,551百万円	1,607百万円
期待運用収益	39	40
数理計算上の差異の発生額	42	48
事業主からの拠出額	86	98
退職給付の支払額	111	147
年金資産の期末残高	1,607	1,647

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	2,612百万円	2,679百万円
年金資産	1,607	1,647
	1,005	1,032
非積立型制度の退職給付債務	-	-
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,005	1,032
退職給付に係る負債	1,005	1,032
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,005	1,032

(注) 執行役員退職慰労引当金を連結貸借対照表上、退職給付に係る負債に含めて表示しております。

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	106百万円	119百万円
利息費用	11	9
期待運用収益	39	40
数理計算上の差異の費用処理額	102	87
過去勤務費用の費用処理額	29	29
確定給付制度に係る退職給付費用	151	146

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は「勤務費用」に計上しております。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
過去勤務費用	29百万円	29百万円
数理計算上の差異	68	48
合計	39	19

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識過去勤務費用	255百万円	226百万円
未認識数理計算上の差異	708	659
合計	453	433

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
債券	49%	37%
株式	20	24
生保一般勘定	16	16
その他	15	23
合計	100	100

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
割引率	0.4%	0.4%
長期期待運用収益率	2.5%	2.5%

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	323百万円	331百万円
貸倒引当金	2,043	2,053
未払事業税	218	162
賞与引当金	292	334
減価償却超過額	288	301
貸倒償却否認額	748	903
その他	291	291
繰延税金資産小計	4,206	4,378
評価性引当額	11	-
繰延税金資産合計	4,195	4,378
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	596	470
リース譲渡の収益及び費用の額の計算の特例	2,358	2,563
繰延税金負債合計	2,954	3,033
繰延税金資産の純額	1,241	1,344

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。		法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(資産除去債務関係)

前連結会計年度末(2018年3月31日)

当社は、本社等オフィスの不動産賃借契約に基づき、オフィスの退去時における原状回復に係る債務を有しております。

なお、賃借契約に関連する敷金が資産に計上されているため、当該資産除去債務の負債計上に代えて、当該敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積り、そのうち当期の負担に属する金額を費用計上する方法によって会計処理をしております。

当連結会計年度末(2019年3月31日)

当社は、本社等オフィス及び太陽光発電事業設備用土地の不動産賃借契約に伴う原状回復義務を資産除去債務として認識しておりますが、当該債務の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

なお、本社等オフィスの賃借契約に関連する敷金は資産に計上されているため、当該資産除去債務の負債計上に代えて、当該敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積り、そのうち当期の負担に属する金額を費用計上する方法によって会計処理をしております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、お客様の幅広い設備導入ニーズにお応えするための「リース・割賦」事業と、金融面に関する課題解決にお応えするための「金融サービス」事業に区分管理し、事業活動を展開しております。報告セグメントは「リース・割賦」「金融サービス」としております。

「リース・割賦」セグメントは、事務用・情報関連機器、医療機器、産業工作機械・計測器等のファイナンス・リース、オペレーティング・リース、割賦・クレジット(貸付取引の満了・中途解約に伴う物件売却等を含む)を行っております。「金融サービス」セグメントは、法人向け融資・業界特化型融資・住宅ローン・マンションローン等の貸付、請求書発行・売掛金回収等の代行サービス、介護報酬ファクタリングサービス、及び住宅賃貸事業等を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自2017年4月1日 至2018年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	リース・割賦	金融サービス	計		
売上高					
外部顧客への売上高	294,360	7,345	301,705	2,636	304,341
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	-	-	-	-
計	294,360	7,345	301,705	2,636	304,341
セグメント利益	13,929	3,414	17,343	234	17,578
セグメント資産	759,012	154,289	913,301	45,463	958,765
その他の項目					
減価償却費	9,801	130	9,931	35	9,967
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	15,794	114	15,909	24	15,933

(注)「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、計測・校正・機器点検等の受託技術サービス及びリコーグループ内での融資、ファクタリング、国内キャッシュ・マネジメント・システムの運営等を含んでおります。

当連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	リース・割賦	金融サービス	計		
売上高					
外部顧客への売上高	303,148	8,282	311,431	2,525	313,957
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	-	-	-	-
計	303,148	8,282	311,431	2,525	313,957
セグメント利益	14,447	3,672	18,119	171	18,291
セグメント資産	798,706	180,052	978,758	52,517	1,031,276
その他の項目					
減価償却費	11,334	179	11,513	135	11,649
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	17,705	4,612	22,317	4,182	26,500

(注) 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、計測・校正・機器点検等の受託技術サービス、リコーグループ内での融資、ファクタリング、国内キャッシュ・マネジメント・システムの運営、及び太陽光発電施設の運営等を含んでおります。

4. 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容（差異調整に関する事項）

（単位：百万円）

売上高	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	301,705	311,431
「その他」の区分の売上高	2,636	2,525
連結財務諸表の売上高	304,341	313,957

（単位：百万円）

利益	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	17,343	18,119
「その他」の区分の利益	234	171
全社費用（注）	1,026	1,014
連結財務諸表の営業利益	16,552	17,276

（注）全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

（単位：百万円）

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	913,301	978,758
「その他」の区分の資産	45,463	52,517
全社資産（注）	10,185	9,401
連結財務諸表の資産合計	968,950	1,040,678

（注）全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない預金、投資有価証券等であります。

（単位：百万円）

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額（注）		連結財務諸表計上額	
	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度
減価償却費	9,931	11,513	35	135	23	20	9,990	11,669
有形固定資産及び無形 固定資産の増加額	15,909	22,317	24	4,182	4	12	15,938	26,512

（注）調整額は社用資産にかかるものであります。

【関連情報】

前連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

1．製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	リース・割賦	金融サービス	その他	合計
外部顧客への売上高	294,360	7,345	2,636	304,341

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3．主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

1．製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	リース・割賦	金融サービス	その他	合計
外部顧客への売上高	303,148	8,282	2,525	313,957

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3．主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自2017年4月1日 至2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

前連結会計年度(自2017年4月1日 至2018年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社	(株)リコー	東京都大田区	135,364	オフィスプリンティング分野、オフィスサービス分野、商用印刷分野、産業印刷分野、サーマル分野及びその他分野においての開発、生産、販売、サービス等の事業	(被所有) 直接 53.02	ファクタリング 資金の借入 役員の兼任	ファクタリング	53,360	その他の営業貸付債権	19,473
							資金の借入	52,272	短期借入金	72,901

当連結会計年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社	(株)リコー	東京都大田区	135,364	オフィスプリンティング分野、オフィスサービス分野、商用印刷分野、産業印刷分野、サーマル分野及びその他分野においての開発、生産、販売、サービス等の事業	(被所有) 直接 53.03	ファクタリング 資金の借入 役員の兼任	ファクタリング	54,853	その他の営業貸付債権	20,085
							資金の借入	60,015	短期借入金	29,617

(イ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

前連結会計年度(自2017年4月1日 至2018年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
同一の親会社を持つ会社	リコージャパン(株)	東京都港区	2,517	事務機器及び消耗品販売	-	リース取引 リコーグループ資金 取引 リース物件の仕入	リース	6,369	リース投資資産	12,644
							資金の借入	10,731	短期借入金	521
							リース物件の仕入高	65,226	支払手形及び買掛金	5,216
	リコーインダストリー(株)	神奈川県厚木市	100	事務機器及び消耗品の製造	-	ファクタリング リコーグループ資金 取引	ファクタリング	15,249	その他の営業貸付債権	5,106
							資金の借入	10,499	短期借入金	9,315
リコーロジスティクス(株)	東京都品川区	448	物流及び船積通関業務	-	ファクタリング	ファクタリング	7,377	その他の営業貸付債権	2,413	
リコーイメージング(株)	東京都大田区	100	デジタルカメラ等光学機器の製造販売	-	リコーグループ資金 取引	資金の貸付	5,817	営業貸付金	5,656	

当連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
同一の親会社を持つ会社	リコージャパン(株)	東京都港区	2,517	事務機器及び消耗品販売	-	リース取引 リコーグループ資金 取引 リース物件の仕入	リース	6,167	リース投資資産	12,136
							資金の借入	11,516	短期借入金	3,907
							リース物件の仕入高	69,579	支払手形及び買掛金	5,466
	リコーインダストリー(株)	神奈川県厚木市	100	事務機器及び消耗品の製造	-	ファクタリング リコーグループ資金 取引	ファクタリング	16,093	その他の営業貸付債権	5,716
						資金の借入	8,008	短期借入金	8,865	

(注) 1. 上記(ア)～(イ)の金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれております。

2. 取引条件等

上記取引については、通常、マーケットで行われている市場取引ベースで行われております。なお、リコーグループ資金取引の取引金額は期中平均残高を記載しております。

(2)連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

金額に重要性がないため、記載を省略しております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

親会社情報

株式会社リコー（東京証券取引所に上場）

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
1株当たり純資産額	5,288.85円	1株当たり純資産額	5,588.38円
1株当たり当期純利益	362.19円	1株当たり当期純利益	382.60円
なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。		なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。	

(注) 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	11,306	11,943
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	11,306	11,943
普通株式の期中平均株式数(千株)	31,216	31,216

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率(%)	担保	償還期限
リコーリース株式会社	第16回無担保社債	2013年 7月12日	10,000 (10,000)	-	0.472	なし	2018年 7月12日
リコーリース株式会社	第18回無担保社債	2014年 1月22日	10,000 (10,000)	-	0.319	なし	2019年 1月22日
リコーリース株式会社	第20回無担保社債	2014年 7月11日	10,000	10,000 (10,000)	0.269	なし	2019年 7月11日
リコーリース株式会社	第21回無担保社債	2015年 8月27日	20,000	20,000	0.266	なし	2020年 8月27日
リコーリース株式会社	第22回無担保社債	2016年 9月26日	10,000	10,000 (10,000)	0.001	なし	2019年 9月26日
リコーリース株式会社	第23回無担保社債	2016年 9月26日	10,000	10,000	0.050	なし	2021年 9月24日
リコーリース株式会社	第24回無担保社債	2017年 2月23日	10,000	10,000 (10,000)	0.001	なし	2020年 2月21日
リコーリース株式会社	第25回無担保社債	2017年 2月23日	10,000	10,000	0.130	なし	2022年 2月23日
リコーリース株式会社	第26回無担保社債	2017年 7月20日	15,000	15,000	0.050	なし	2020年 7月17日
リコーリース株式会社	第27回無担保社債	2017年 7月20日	10,000	10,000	0.160	なし	2022年 7月20日
リコーリース株式会社	第28回無担保社債	2017年 7月20日	5,000	5,000	0.345	なし	2027年 7月20日
リコーリース株式会社	第29回無担保社債	2018年 1月23日	10,000	10,000	0.080	なし	2021年 1月22日
リコーリース株式会社	第30回無担保社債	2018年 1月23日	10,000	10,000	0.160	なし	2022年 1月21日
リコーリース株式会社	第31回無担保社債	2018年 1月23日	5,000	5,000	0.300	なし	2025年 1月23日
リコーリース株式会社	第32回無担保社債	2018年 9月7日	-	10,000	0.050	なし	2021年 9月7日
リコーリース株式会社	第33回無担保社債	2018年 9月7日	-	10,000	0.190	なし	2023年 9月7日
リコーリース株式会社	第34回無担保社債	2019年 2月28日	-	10,000	0.100	なし	2022年 2月28日
合計	-	-	145,000 (20,000)	155,000 (30,000)	-	-	-

(注) 1. 「当期末残高」欄の(内書)は、1年内償還予定の金額であります。

2. 連結決算日後5年間の償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
30,000	45,000	50,000	10,000	10,000

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	111,045	56,292	0.01	-
1年以内に返済予定の長期借入金	75,725	104,472	0.20	-
1年以内に返済予定のリース債務	35	9	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	374,911	399,438	0.20	2020年～2030年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	143	132	-	2020年～2022年
その他有利子負債 コマーシャル・ペーパー(1年以内返済予定)	-	40,000	0.01	-
合計	561,859	600,345	-	-

- (注) 1. 「平均利率」については、期末借入金等残高に対する加重平均利率を記載しております。
 2. リース債務は転リース取引に係る債務であり、利息相当額を認識しない方法を採用しているため、平均利率については記載しておりません。
 3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	98,498	120,640	82,500	46,500
リース債務	33	9	0	-

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	78,239	155,412	234,542	313,957
税金等調整前四半期(当期)純利益金額 (百万円)	4,387	8,700	13,346	17,383
親会社株主に帰属する四半期(当期) 純利益金額(百万円)	3,015	5,988	9,176	11,943
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	96.58	191.84	293.97	382.60

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額(円)	96.58	95.26	102.13	88.63

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,762	2,099
割賦債権	1 123,972	1 148,962
未収賃貸債権	37,928	36,238
リース債権	1 39,792	1 39,319
リース投資資産	1 510,037	1 524,097
営業貸付金	2 150,061	2 169,740
その他の営業貸付債権	2 45,726	2 49,637
その他の営業資産	4 5,058	4 5,037
賃貸料等未収入金	2 5,885	2 6,644
前払費用	710	610
未収収益	133	182
未収入金	6,283	6,846
その他	2 15,723	2 15,001
貸倒引当金	7,783	7,857
流動資産合計	936,292	996,561
固定資産		
有形固定資産		
賃貸資産		
賃貸資産	16,461	24,761
賃貸資産合計	16,461	24,761
社用資産		
建物	69	65
機械及び装置	-	2,659
車両	41	37
器具備品	325	410
建設仮勘定	-	1,405
社用資産合計	437	4,578
有形固定資産合計	16,898	29,340
無形固定資産		
賃貸資産		
賃貸資産	1,045	1,013
賃貸資産合計	1,045	1,013
その他の無形固定資産		
ソフトウェア	1,227	1,359
その他	0	0
その他の無形固定資産合計	1,227	1,359
無形固定資産合計	2,272	2,373
投資その他の資産		
投資有価証券	5,293	5,308
関係会社株式	653	153
破産更生債権等	945	592
長期前払費用	665	605
繰延税金資産	695	789
その他	916	1,300
貸倒引当金	619	540
投資その他の資産合計	8,549	8,209
固定資産合計	27,720	39,922
資産合計	964,012	1,036,483

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	3 1,050	3 1,212
買掛金	2 17,863	2 20,613
短期借入金	38,143	26,674
関係会社短期借入金	72,901	29,617
1年内償還予定の社債	20,000	30,000
1年内返済予定の長期借入金	75,725	104,472
コマーシャル・ペーパー	-	40,000
支払引受債務	30,500	32,920
リース債務	35	9
未払金	2 2,182	2 2,319
未払法人税等	2,712	2,792
未払費用	482	587
賃貸料等前受金	3,604	3,992
預り金	14,245	17,841
前受収益	52	34
割賦未実現利益	12,659	15,799
賞与引当金	752	886
役員賞与引当金	48	56
流動負債合計	292,959	329,830
固定負債		
社債	125,000	125,000
長期借入金	374,911	399,438
リース債務	143	132
退職給付引当金	325	354
受取保証金	7,021	8,787
その他の固定負債	139	201
固定負債合計	507,541	533,914
負債合計	800,501	863,745
純資産の部		
株主資本		
資本金	7,896	7,896
資本剰余金		
資本準備金	10,159	10,159
その他資本剰余金	0	0
資本剰余金合計	10,160	10,160
利益剰余金		
利益準備金	284	284
その他利益剰余金		
別途積立金	128,045	136,045
繰越利益剰余金	15,824	17,316
利益剰余金合計	144,153	153,645
自己株式	48	48
株主資本合計	162,161	171,653
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	1,349	1,084
評価・換算差額等合計	1,349	1,084
純資産合計	163,511	172,738
負債純資産合計	964,012	1,036,483

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	1, 4 295,050	1, 4 303,681
売上原価	2, 3, 4 265,583	2, 3, 4 272,638
売上総利益	29,466	31,042
販売費及び一般管理費		
支払手数料	2,794	2,989
従業員給料及び手当	3,626	3,800
従業員賞与	665	787
賞与引当金繰入額	752	886
役員賞与引当金繰入額	52	56
貸倒引当金繰入額	1,547	1,633
減価償却費	687	634
賃借料	544	569
その他	2,819	3,060
販売費及び一般管理費合計	4 13,490	4 14,418
営業利益	15,976	16,623
営業外収益		
受取配当金	32	53
投資有価証券売却益	1	30
投資事業組合運用益	53	139
子会社清算益	-	215
その他	56	98
営業外収益合計	4 142	4 538
営業外費用		
支払利息	10	10
社債発行費	214	115
その他	38	50
営業外費用合計	263	176
経常利益	15,856	16,985
税引前当期純利益	15,856	16,985
法人税、住民税及び事業税	4,834	5,121
法人税等調整額	13	30
法人税等合計	4,821	5,151
当期純利益	11,035	11,833

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計
						別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	7,896	10,159	0	10,160	284	120,045	14,817	135,146
当期変動額								
別途積立金の積立						8,000	8,000	-
剰余金の配当							2,029	2,029
当期純利益							11,035	11,035
自己株式の取得								
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	-	-	-	-	-	8,000	1,006	9,006
当期末残高	7,896	10,159	0	10,160	284	128,045	15,824	144,153

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	48	153,156	860	860	154,016
当期変動額					
別途積立金の積立		-			-
剰余金の配当		2,029			2,029
当期純利益		11,035			11,035
自己株式の取得	0	0			0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			489	489	489
当期変動額合計	0	9,005	489	489	9,494
当期末残高	48	162,161	1,349	1,349	163,511

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計
						別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	7,896	10,159	0	10,160	284	128,045	15,824	144,153
当期変動額								
別途積立金の積立						8,000	8,000	-
剰余金の配当							2,341	2,341
当期純利益							11,833	11,833
自己株式の取得								
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	-	-	-	-	-	8,000	1,492	9,492
当期末残高	7,896	10,159	0	10,160	284	136,045	17,316	153,645

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	48	162,161	1,349	1,349	163,511
当期変動額					
別途積立金の積立					
剰余金の配当		2,341			2,341
当期純利益		11,833			11,833
自己株式の取得	0	0			0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			265	265	265
当期変動額合計	0	9,492	265	265	9,227
当期末残高	48	171,653	1,084	1,084	172,738

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

イ. 子会社株式.....移動平均法による原価法

ロ. その他有価証券

・ 時価のあるもの.....事業年度の末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

・ 時価のないもの.....移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資(金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの)については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

(2) デリバティブ取引.....時価法

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

リース資産.....主にリース期間を償却年数とし、リース期間満了時の処分見積額を残存価額とする定額法によっております。

レンタル資産.....経済的、機能的な実情を勘案した合理的な償却年数に基づく定額法によっており、主なレンタル資産である事務用機器の償却年数は2年～3年であります。

社用資産.....主に定率法によっております。ただし、2016年4月1日以降に取得の建物附属設備については定額法によっております。
主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 10年～15年

機械及び装置 15年～20年

車両 5年～6年

器具備品 3年～6年

(2) 無形固定資産

リース資産.....リース期間を償却年数とし、リース期間満了時の処分見積額を残存価額とする定額法によっております。

自社利用のソフトウェア.....社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

3. 繰延資産の処理方法

社債発行費については支出時に全額費用処理しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率、貸倒懸念債権及び破産更生債権については財務内容評価法によっております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、支給見積額のうち、当事業年度に対応する負担額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員の賞与の支給に備えるため、当事業年度末における支給見込額を計上しております。

(4) 退職給付引当金

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

なお、過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(12年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(12年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の貸借対照表における取扱いが連結貸借対照表と異なります。

5. 収益及び費用の計上基準

(1) リース取引の処理方法

ファイナンス・リース取引に係る売上高及び売上原価の計上基準は、リース料を収受すべき時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。

(2) 個品あっせん取引の収益計上方法

個品あっせん取引は商品の引渡時に、その契約高の全額を割賦債権に計上し、手数料総額を分割回数で按分した金額を、支払期日到来の都度収益として計上しております。

なお、期日未到来の割賦債権に対応する割賦未実現利益は、繰延処理しております。

(3) 金融費用の計上方法

金融費用は、営業収益に対応する金融費用とその他の金融費用に区分計上することとしております。その区分方法は、総資産を営業取引に基づく資産とその他の資産に区分し、その資産残高を基準として、営業資産に対応する金融費用は資金原価として売上原価に、その他の資産に対応する金融費用を営業外費用に計上しております。なお、資金原価は、営業資産にかかる金融費用からこれに対応する預金の受取利息等を控除して計上しております。

6. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

当社のヘッジ会計の方法は、当社の一部の資産・負債について、繰延ヘッジ、あるいは特例処理の要件を満たす金利スワップ取引については、特例処理によっており、一体処理（特例処理、振当処理）の要件を満たす金利通貨スワップ取引については、一体処理によっています。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

a. ヘッジ手段

金利スワップ取引及び金利オプション取引、通貨スワップ取引

b. ヘッジ対象

借入金、社債、営業貸付金等

(3) ヘッジ方針

当社は、長期確定の運用取引であるリース事業が中心であるため、このリース資産購入のために調達する資金の変動金利支払に対して、金利変動リスクを一定、またはある範囲内に限定するヘッジ目的で、金利スワップ・金利オプション・通貨スワップを利用しております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

(5) その他

当社のデリバティブ取引は、社内規程に基づき厳格に執行・管理されております。デリバティブ取引は経営管理本部が行っており、社内規程の範囲内で担当執行役員が承認権限を有しております。

デリバティブ取引の取組状況や評価損益・リスク量等については、毎月経営者層で構成されるALM委員会に報告しております。

内部管理体制については、経営管理本部内において執行担当者と事務管理担当者の分離を明確にしております。事務管理担当者は、取引の都度、執行担当者からの取引報告と契約先から直接送付されてくる明細を照合し、取引内容の確認を行っております。

7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 未収賃貸債権

新たなリース契約の締結に伴う旧リース物件の合意解約時における債権残高は、未収賃貸債権として表示しております。なお、当該債権額は新リース契約の期間にわたって回収されます。

(2) その他の営業貸付債権及び支払引受債務

その他の営業貸付債権及び支払引受債務は、ファクタリングに係る未収金及び未払金であります。

(3) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(貸借対照表)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」1,104百万円は「投資その他の資産」の「繰延税金資産」に組替えた後に、「固定負債」の「繰延税金負債」408百万円と相殺表示しております。

(貸借対照表関係)

1 リース・割賦販売契約等に基づく預り手形

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
リース債権及びリース投資資産	1,089百万円	1,150百万円
割賦債権	5,382百万円	4,397百万円

2 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	26,313百万円	30,364百万円
短期金銭債務	277百万円	266百万円

3 事業年度末日満期手形の会計処理

事業年度末日満期手形の会計処理については、支払手形は満期日に決済が行われたものとして処理しております。当事業年度末日満期手形の金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
支払手形	199百万円	1,107百万円

4 リース債権流動化に伴う劣後信託受益権であります。

5 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引金融機関20社と当座貸越契約及び貸出コミットメント契約を締結しております。これらの契約に基づく事業年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額及び貸出コミットメントの総額	138,500百万円	138,500百万円
借入実行残高	-百万円	-百万円
差引額	138,500百万円	138,500百万円

(損益計算書関係)

1 リース売上高の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
ファイナンス・リース料収入	202,592百万円	206,525百万円
オペレーティング・リース料収入	14,224百万円	15,484百万円
賃貸資産売上及び解約損害金	19,784百万円	19,415百万円
その他のリース料収入	153百万円	142百万円
計	236,755百万円	241,567百万円

2 リース原価の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
ファイナンス・リース原価	182,864百万円	186,326百万円
オペレーティング・リース資産減価償却費 及び処分原価	5,156百万円	5,850百万円
固定資産税等諸税	4,134百万円	4,225百万円
保険料	865百万円	857百万円
その他のリース原価(注)	20,993百万円	20,858百万円
計	214,014百万円	218,117百万円

(注) 解約等による処分原価等であります。

3 資金原価の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
支払利息	1,087百万円	1,023百万円
受取利息	0百万円	0百万円
差引計	1,087百万円	1,022百万円

4 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	1,716百万円	2,240百万円
仕入高	1,767百万円	3,080百万円
その他の営業取引	149百万円	99百万円
営業取引以外の取引による取引高	40百万円	49百万円

(有価証券関係)

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式653百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式153百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付引当金	99百万円	108百万円
貸倒引当金	2,042百万円	2,052百万円
未払事業税	213百万円	156百万円
賞与引当金	264百万円	308百万円
減価償却超過額	7百万円	8百万円
貸倒償却否認額	748百万円	903百万円
その他	283百万円	284百万円
繰延税金資産小計	3,661百万円	3,822百万円
評価性引当額	11百万円	-百万円
繰延税金資産合計	3,649百万円	3,822百万円
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	596百万円	470百万円
リース譲渡の収益及び費用の額の計算の特例	2,358百万円	2,563百万円
繰延税金負債合計	2,954百万円	3,033百万円
繰延税金資産の純額	695百万円	789百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。		法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	減価償却 累計額 (百万円)
有形固定資産						
賃貸資産						
オペレーティング・リース資産						
事務用機器・情報関連機器等	16,461	14,175	834	5,041	24,761	15,236
賃貸資産計	16,461	14,175	834	5,041	24,761	15,236
社用資産						
建物	69	10	0	13	65	279
機械及び装置	-	2,758	-	99	2,659	99
車両	41	14	0	18	37	98
器具備品	325	191	2	104	410	664
建設仮勘定	-	1,405	-	-	1,405	-
社用資産計	437	4,380	3	235	4,578	1,141
有形固定資産計	16,898	18,556	837	5,276	29,340	16,378
無形固定資産						
賃貸資産						
オペレーティング・リース資産						
ソフトウェア	1,045	285	0	316	1,013	-
賃貸資産計	1,045	285	0	316	1,013	-
その他の無形固定資産						
ソフトウェア	1,227	630	-	498	1,359	-
電話加入権	0	-	-	-	0	-
その他の無形固定資産計	1,227	630	-	498	1,359	-
無形固定資産計	2,272	915	0	814	2,373	-

- (注) 1. 有形固定資産及び無形固定資産の賃貸資産に係る当期増加額は、オペレーティング・リースのための資産の購入及び所有権移転外ファイナンス・リース取引が再リース取引となったことに伴うリース投資資産からの振替額であります。
 また、当期減少額は、賃貸契約の満了及び解約により賃貸資産を売却又は廃棄したことによるものです。
 2. 当期は太陽光発電事業用設備の取得によって建設仮勘定及び機械及び装置が増加しております。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	8,403	1,633	1,638	8,398
賞与引当金	752	886	752	886
役員賞与引当金	48	56	48	56

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取手数料	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由により電子公告によることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL http://www.r-lease.co.jp
株主に対する特典	株主優待 (1)対象株主 毎年3月31日現在の株主名簿及び実質株主名簿に記載された100株(一単元)以上保有の株主 (2)優待内容 クオカード 保有継続期間1年未満:3,000円相当 保有継続期間1年以上:4,000円相当 保有継続期間3年以上:5,000円相当 保有継続期間の認定は、3月末を基準とする。

(注) 単元未満株式についての権利

当社定款の定めにより単元未満株式を所有する株主は、次に掲げる権利以外の権利を行使できない。

- ・会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- ・会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- ・株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
- ・単元未満株式の買増しを請求する権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

1．有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

(第42期)(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

2018年6月19日関東財務局長に提出

2．内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月19日関東財務局長に提出

3．四半期報告書及び確認書

(第43期第1四半期)(自 2018年4月1日 至 2018年6月30日)2018年8月14日関東財務局長に提出

(第43期第2四半期)(自 2018年7月1日 至 2018年9月30日)2018年11月6日関東財務局長に提出

(第43期第3四半期)(自 2018年10月1日 至 2018年12月31日)2019年2月6日関東財務局長に提出

4．臨時報告書

2019年5月9日関東財務局に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の4(監査公認会計士等の異動)に基づく臨時報告書であります。

5．発行登録書(普通社債)及びその添付書類

2018年12月20日関東財務局に提出

6．発行登録追補書類(普通社債)及びその添付書類

2019年2月22日関東財務局に提出

7．訂正発行登録書

2019年5月9日関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月21日

リコーリース株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 林 秀行
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 高津 知之
業務執行社員

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているリコーリース株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、リコーリース株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、リコーリース株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、リコーリース株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が連結財務諸表及び内部統制報告書に添付する形で別途保管しております。
 2. X B R L データは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月21日

リコーリース株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 林 秀行
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 高津 知之
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているリコーリース株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第43期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、リコーリース株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
 2. X B R L データは監査の対象には含まれておりません。